

# 島崎藤村のパリ逃避行と『新生』をめぐる

福永勝也

## ●はじめに

『若菜集』の詩人として青春期に近代日本を浪漫的に謳い上げた島崎藤村は、その後、散文の世界に創作の場を移し、処女作『破戒』によって華々しく小説家デビューを果たす。そして、それを契機として『蒲団』の作者、田山花袋とともに、わが国の自然主義文学の開花に重要な役割を担うことになる。その後、藤村は作品『春』『家』『新生』に代表されるように、自伝的で告白的色彩が濃厚な私小説を相次いで発表し、文壇に「藤村文学」という金字塔を打ち建てる。その締め括りともいべき作品が晩年の長篇『夜明け前』で、そこには藤村の自己存在の原点であった狂死した父親とその生涯、そして自身の人生を自己凝視という形で投影されている。

このように、藤村作品には常に「内なるもの」への探究が主要テーマとして設定されている。そして、それら作品群の中で、文壇ばかりか社会に強烈な衝撃を与えたのが『新生』である。この作品は、妻が出産時に不慮の死を遂げたため、家事と子育ての手伝いにやって来ていた女学校を卒業したばかりの姪と肉体関係を結び、その姪が藤村の子を宿すという「近親相姦」の物語である。

そして、その許されざる背徳のスキヤンダルから逃避するため、藤村（『新生』では岸本捨吉）は姪を日本に置き去りにして一人フランスへと旅立つ。当地で自身の犯した罪業を懺悔する日々を送り、三年後に帰国するが、事もあろうに、その姪と再び禁断の関係に陥る。そして、この人間倫理に背く叔父と姪の愛欲関係を、藤村は事実即した告白小説として、新聞連載という形で世間に公表するのである。

進んで恥を暴露する行為は自身の社会的名誉の毀損、さらに姪にとって

は“疵物”<sup>きずもの</sup>と見られること必定の重大事だったが、これについて亀井勝一郎は「(この作品は藤村が：筆者挿入)全存在をあげて描いた一の『宿命』であり、自己凝視の深まりからくる反覆の故でもある」とその創作意図<sup>(1)</sup>を看破し、この作品ほど「人間藤村」を浮き彫りにしたものは無いと考察する。

それに加えて、この作品には藤村が<sup>おそ</sup>怖れ<sup>おの</sup>慄いてきた自身の家系に流れる「黒い血」や、それに由縁する宿命的な業としての「性の陷穽」<sup>かんせい</sup>が随所に散見される。そして、これは作品の本源的な作意に関わることだが、いかなる世俗的犠牲を払ってでも、その「生き地獄」から脱出したいという藤村の悲痛な“叫び”が根底にあるといっても過言ではない。

このように、強烈な自己凝視の賜物<sup>たまもの</sup>であるこの作品に対する文学的評価は、その<sup>けたはず</sup>桁外れの特異性ゆえに文壇でも評価が大きく分かれている。田山花袋や有島生馬、円地文子、室生犀星、生田葵山たちが一定の評価をしているものの、尾崎一雄や高井有一、車谷長吉、さらに芥川龍之介に至っては、藤村を<sup>こうかつ</sup>「狡猾な偽善者」と激しく<sup>ばとう</sup>罵倒している。彼を「悪人」「犯罪者」<sup>ののし</sup>と罵った作家もいた。

実際のところ、藤村のいずれの作品も、漱石小説のように仄々として爽やか、そしてしみじみとした人間味が<sup>にじ</sup>滲み出ているものは皆無に近い。そればかりか、それらのどの作品も暗くて、陰鬱で、猜疑心や嫉妬心といった重苦しい翳<sup>かげ</sup>が宿っている観がある。それ故、考えさせられる作品ではあるが、好きにはなれないといった評価に<sup>つな</sup>繋がるのだが、これらの評価は作品の産みの親である藤村自身にそのまま跳ね返るのである。

本稿は、姪との許されざるスキャンダルから逃れるために日本を脱出し、辿り着いたパリでの「寂しき異邦人」としての悔恨<sup>ざんげ</sup>と懺悔の日々、そしてそれを忘却したかのように繰り返される日本人留学生たちとの交遊の数々を、日本の新聞社に書き送った原稿や帰国後に発表した小説『新生』、さらに残された資料等<sup>しよりりよう</sup>を渉獵することによって浮き彫りにしてみた。また、その過程において醸成されて行った藤村の西洋観や日本論、さらには自己を凝視するけれども自己を語らず、ややもすると暗闇に身を隠したままの

「島崎藤村」という人間の素顔にも迫ってみた。

### ●島崎家の黒い血の呪縛と失恋による彷徨<sup>ほうこう</sup>の旅

一八七二(明治五)年三月二五日、藤村は長野県神坂村で代々、本陣と庄屋を務めていた名家、島崎家の一七代目当主の父、正樹と母、ぬいの四男として生を受ける。七人兄姉の末っ子で、本名は春樹(以後、呼称を「藤村」で統一)である。父の正樹は菩提寺に放火するなどして、後に座敷牢で狂死しているが、そのような複雑な家庭の事情もあって、藤村少年はすぐ上の兄で三男の友弥とともに上京し、東京・泰明学校(後の泰明小学校)に入学する。

この友弥は、実は母親の過ちによって生まれた不倫の子だった。その出生の秘密を知った彼は勉学意欲を喪失し、その後、怠惰<sup>ゆうとう</sup>と遊蕩<sup>やっ</sup>に身を窺<sup>うかが</sup>して、人生半ばにして不遇の生涯を閉じる。一方、父の正樹も性に対して自堕落なところがあり、近親女性との相姦<sup>もと</sup>という人倫に悖<sup>も</sup>る背徳の過去を持っていた。つまり、両親そろって不義、密通の経験者だったわけで、その島崎家の血の成せる業なのか、藤村も後にその汚名の列に加わることになる。藤村がしばしば口にした「島崎家の黒い血」や「親譲りの憂鬱」といった言葉の原点が、ここにあった。

藤村は少年期に読んだナポレオンなどの偉人伝に感化され、将来、そのような立志伝中の政治家になることを夢見て熱心に英語を勉強する。当時、エリートの登竜門だった一高の受験に失敗するが、心機一転、英語力の向上を目指して、一八八七(明治二〇)年九月に創設されたばかりのミッション・スクール「明治学院」(現・明治学院大学)に一期生として入学する。

当時の藤村は多分に「西洋被<sup>かぶ</sup>れ」しており、お洒落な洋服に青と白の派手な靴下といった出で立ちで登校、さらに裕福な家庭の子女たちが集うキリスト教会にも頻<sup>ひんぱん</sup>繁に出入りしている。当時、これら女子との出会いを求めて、多くの若者が教会や日曜学校に押し寄せているが、藤村もその一人だったのである。信州出身の田舎者から洗練された都会人への変身願望が

ひと一倍強かった藤村は、それが嵩じて東京・高輪の台町教会で洗礼を受けている。

このように、藤村は「性」に対して早熟で、若い頃から女性に強い関心を抱いていた。初恋は七、八歳の頃にまで遡り、その相手は隣家の「大脇ゆう」という美少女だった。「まだあげ初めし前髪の／林檎のもとに見えしとき／前にさしたる花櫛の／花ある君と思ひけり」（「初恋」という詩は、彼女に対する初々しい恋心を謳い上げたものとされる。

一八九一(明治二四)年に同学院を卒業した藤村は、その翌年、自身の文学人生を決定づける人物に邂逅する。恋愛至上主義の詩人、北村透谷で、彼はこの年の二月、明治学院の姉妹校である明治女学校発行の「女学雑誌」に、「恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり」で始まる衝撃的な論文「厭世詩家と女性」を発表していた。恋愛は単なる思慕や春情に止まらず、この世にあるべき美しい理想を再認させる唯一のもの、それは詩人にとって最後の砦で、人生において至高の存在とする激烈な「恋愛讃歌」である。これこそ、藤村が心の深奥に描いていた恋愛観そのものであって、それを読んで大いに感激した藤村はさっそく透谷を訪ね、二人は意気投合する。

そのような縁もあって藤村はその年の秋、明治女学校に就職し、高等科の英語講師として「英語」と「英文学初歩」を担当する。当時、高等科の女学生は二二歳前後で、いずれも藤村より年上だったが、藤村はここで身を焦がすような激しい恋の相手と巡り合う。教え子の高等科一年生、佐藤すけこ輔子である。

彼女は藤村より一歳年長で、東京・一番町教会で受洗したクリスチャンだった。秀麗で成績抜群、しかもその一挙手一投足には眩いばかりの気品が漂っており、藤村はすっかり彼女への愛の虜になってしまう。しかし、それも東の間、彼女には郷里の花巻に両親が決めた許婚がいることが分かり、藤村は絶望のどん底に突き落とされてしまう。

以来、教室で彼女の顔を見るのが辛くなり、翌一八九三(明治二六)年一

月、教職在任わずか三か月という短さで藤村は突然、辞職してしまう。そして、その足で東京を発ち、鎌倉、沼津、興津、熱田、四日市、大津、京都へと放浪の旅に出るのである。神戸では須磨の漁師宅に寄宿して海と戯れ、四国に渡った後、再び京都に舞い戻る。そして、奈良の吉野山、近江の石山寺、さらに元箱根へと逆ルート<sup>たど</sup>を辿って、九月中旬に東京に帰着する。しかし、休む間もなく、今度は東北地方へと旅立ち、日本列島を縦断する傷心の「漂泊の旅」を終えて、再び東京に戻ったのは一二月下旬のことだった。

一方、そのような藤村の胸中を知らぬ輔子はしっかりと勉学に励み、卒業式では総代として答辞を読んでいる。そして、その翌年の五月、予定通り故郷で許婚<sup>いいなずけ</sup>と結婚し、間もなく妊娠する。しかし、連日のように激しい悪阻<sup>つわり</sup>に苛まれ、それに起因すると思われる心臓病を併発して、一八九五年(明治二八)八月に短くも儂<sup>はかな</sup>い生涯を終えるのである。

このように、藤村の身を焦がした“叶わぬ恋”の女神はひっそりとこの世を去るが、その後、驚愕<sup>いいなずけ</sup>すべき事実が判明する。彼女が残した日記帳に、「心は春樹に捧げ、肉体は許婚<sup>いいなずけ</sup>に捧げる」と書かれていたのである。藤村は失恋の痛手を胸に果て無き彷徨<sup>ほうこう</sup>の旅に出たわけだが、二人は見えざるその精神世界において「愛」を成就させていたのである。後日、このことを知った藤村の心中は如何ばかりのものであっただろう。

藤村は彼女の面影を胸に抱いて流離<sup>さすらい</sup>の旅を続けたが、その尽きない懊惱<sup>おうのう</sup>を通して愛と自我、そして自己存在の意味を考え続ける。そしてその一助となったのが、持参したドストエフスキーの『罪と罰』とジャン・ジャック・ルソーの『告白録』(懺悔録)だった。この両著がその後、開花することになる「藤村文学」の燭光となったことは言うまでもない。

## ●『破戒』の発表と相談後して起きた不幸の連鎖

その翌年、藤村は「文学界」に『野末ものがたり』を発表するが、この時、初めて「藤村」の雅号を用いている。これについては、熱い想いを寄

せた輔子の姓(佐藤)の一字、さらには藤村がその生き様に深く共鳴した芭蕉の句「くたびれて宿借るころや藤の花」の「藤」から取ったものとする説がある。

このような青春の蹉<sup>きてつ</sup>踏を経て、藤村は一八九九(明治三二)年四月、英語と国語の教師として信州の小諸義塾(中学校)に赴任する。そしてその翌月、明治女学校の卒業生で、輔子の後輩に当たる秦冬子と結婚する。

冬子との結婚生活は表向き、順調に推移し、三児をもうける。しかし、後になって、冬子が結婚前、函館の実家で働いていた使用人の男に心を寄せていたことを知って、藤村が激怒するという“事件”が起きている。冬子にしてみれば、淡い初恋に踏ん切りをつけて藤村と結婚したわけで、不倫したわけでもなく、夫から殊<sup>ことさら</sup>更、責められる謂<sup>い</sup>われの無いものだった。以来、二人の間で諍<sup>いさか</sup>いが絶えず、夫婦間に隙間風が吹くようになる。

それと軌を一にして、藤村の家庭にはまるで呪われたかのように次々と不幸が襲来する。一九〇五(明治三八)年五月に三女、縫子(一歳)が急性脳膜炎で亡くなり、翌年四月に次女、孝子(四歳)が急性消化不良で、そしてその二カ月後の六月には長女、みどり(六歳)が結核性脳膜炎で夭折するのである。

この頃、「小諸なる古城のほとり」を収録した藤村の詩集『落梅集』が与謝野鉄幹から激賞される。しかし、藤村はこれを最後に小説家への転進を決意し、翌一九〇六(明治三九)年三月に長篇小説『破戒』を自費出版して、待望の作家デビューを果たしている。この作品は、被差別部落出身の青年を主人公にして、社会差別に対する憤りと反抗をリアルに描いたもので、夏目漱石が「後世に残る名作」と高く評価する。そして、それが契機となって、藤村は朝日新聞に小説『春』を連載することになる。

三人の幼い娘を相次いで病<sup>やまい</sup>で失うという尋常ならざる不幸の連鎖があった折だけに、文壇では華やかにデビューした藤村が家庭や家族を顧みず、創作活動に専念したのが原因だったのではないかとする憶測<sup>ささや</sup>が囁かれた。つまり、執筆に没頭するあまり家計<sup>けい</sup>が逼迫<sup>ひつぱく</sup>し、子供たちが栄養失調に陥つ

て病魔に侵されたのではないかという噂である。出世作『破戒』に向けた藤村の執念に鬼気迫るものがあったのは事実で、その間、妻の冬子も栄養不良が祟<sup>たた</sup>って夜盲症に罹患している。

不幸の連鎖はその後も続き、一九〇七(明治四〇)年八月には『破戒』の自費出版費用を工面してくれた妻の実家が函館大火によって焼失してしまう。そして、その三年後の一九一〇(明治四三)年八月には、四女、柳子を出産した妻、冬子が産後の大量出血で急死するのである。その日、藤村は所用で外出して出産に立ち会っておらず、自宅を留守にしている間の悲劇だった。

### ●<sup>おとこやめ</sup>男寡の鬱屈した欲望と地獄へと続く近親相姦の泥沼

妻の死によって、当時三十九歳の藤村に四人の幼な子が残された。小説家である藤村が男手一つで彼らの養育が出来るはずはなく、結局、長男、楠雄と二男、鶏二は残すものの、三男、霧助と生まれたばかりの柳子は親戚に引き取ってもらうことにした。それに加えて、新たに婆やを雇うと同時に、次兄、広助の長女、久子にも手伝いに来てもらうことになった。

そして翌一九一一(明治四四)年の春には、女学校を卒業したばかりの久子の妹、こま子が藤村家の手伝いに加わるのである。藤村は幼い子供二人に姪二人、そして婆やに囲まれた安寧<sup>あんねい</sup>な日々を取り戻し、執筆に専念する。その間、幾つかの再婚話が持ち込まれるが、藤村はそれらに振り向きもせず、ひたすら原稿用紙に向かって創作活動に没頭するのだった。

このように真面目徹な作家生活を送っていた藤村であるが、妻を失ったが故の性的喪失感が影響を与えていたのか、男盛りの身体<sup>からだ</sup>の奥底に「女」に対する欲望が徐々に頭を擡<sup>もた</sup>げ始める。実際、その頃に書かれた作品群の中には、その後の藤村からは想像できないような“奇作”が散見される。

一九一二(明治四五)年の春に発表された短編集『食後』に収められた作品がその端的な例で、そこには母と娘が同じ男をめぐる激しく争う醜い

愛欲の世界、さらに妻を亡くした初老の男が残された愛妻の刺繡ししゅうに頼ずりして、耽美な思い出に浸るという生々しい官能と性愛の世界が描き出されている。これらは、日常生活において聖人君子然とした藤村の中に、知らず知らずのうちに性的欲望が燃え上がっていたと考えることも可能なのである。

そして、その年の六月初旬、姪の久子が外交官と結婚して島崎家を去っている。彼女は利発で明るく派手な性格だったが、同じ姉妹というのに、妹のこま子の方は何事につけ引っ込み思案で、内気でおとなしい娘だった。そして姉の結婚後、取り残されたような気持ちになったのか、こま子は口数が減り、表情も沈みがちになっていた。

そのような少女の面影を残したこま子と、藤村は事もあろうに道徳上、到底許されない肉体関係を結ぶのである。礼儀正しく、何事に対しても分別があると見られていた藤村と、その高名な叔父を心から尊敬し、慕っていた姪との悍ましい「近親相姦」である。その関係に至った経緯いきざつは、藤村の告白小説『新生』を紐解いても定かではないが、それが藤村主導の行為であったことは言うまでもない。

この道ならぬ背徳不倫の関係に藤村が良心の呵責かしやくを覚え、後悔の念さいなに苛まれたことは疑うべくもない。しかし一旦、掌中にした乙女子であるこま子の顔、そしてその匂い立つ女体に接すると、そのような道徳的煩悶は影を潜め、両親から受け継いだ「黒い血」の成せる業なのか、藤村は地獄へと続く肉欲の泥濘ぬかるみに墮ちて行くのである。

そして、劇的な日を迎える。ある日の夕方、こま子から「妊娠」の事実を告げられるのである。事実関係において日記より正確とされる『新生』には、「ある夕方、節子(筆者挿入：こま子)は岸本(同：藤村)に近く来た。突然彼女は思い屈したような調子で言出した。『私の様子は、叔父さんにはよくお解りでしょう』」「節子は極く小さな声で、彼女が母になったことを岸本に告げた」「思わず岸本はそれを聞いて震えた(2)」とある。

この時、節子(こま子)二十一歳、岸本(藤村)は四十二歳だった。後日、



こま子が発表した手記によると、最初の肉体関係が生じたのは、姉の久子が結婚して島崎家を去る一カ月前の五月初めとなっている。これが事実とすれば、姉がいた時から藤村は“過ち”を始めていたことになる。

### ●こま子とのスキャンダル発覚を怖れてパリへの逃避を決意

美貌、高学歴、都会的、そして洗練された良家の子女といった女性に心惹かれる傾向のあった藤村にとって、こま子はどちらかというところらの範疇外で、藤村にとって愛の対象である女性だったとは思えない。そうだとすれば、藤村にとってこま子はいつでも手を出すことの出来る身近な存在—というのが、男女関係を結ぶに至った大きな要因だったのかもしれない。

いずれにせよ、叔父と姪の近親相姦や妊娠、出産という事態は、倫理的にも社会的にも、そして法的にも許されない一大事であった。しかも、そのことが世間に露見すると、謹厳実直な小説家として名を成していた藤村の評判に傷がつくことは火を見るよりも明らかである。このような絶体絶命の苦境に陥れば、一般的には自殺の可能性も有り得るが、藤村の場合、人の屍を踏み越えてでも生き延びるという「生」に対する執着心がひと一倍強く、「自死」といった考えは毛頭なかった。

そうなれば、後は「現実」からの遁走しか無いわけで、藤村はこま子の両親や親戚、文人仲間を含め、誰にもこの“事件”を打ち明けることなく、密かに異国に旅立つことを決意する。熟考の末に辿り着いた逃避先はフランス、それも「芸術の都」であるパリと決める。これについて、文学の同志である田山花袋たちには、真実を隠蔽して「文学の修行のため」と説明している。

この洋行を決意するに至った様子を、藤村(岸本)は『新生』で次のように述べている。「一切を捨てて海の外へ出て行こう。全く知らない国へ、全く知らない人の中へ行こう。そこへ行<sup>(3)</sup>って恥かしい自分を隠そう」「遠い外国の旅— どうやらこの沈滞の底から自分を救い出せそうな一筋の細

道が一層ハッキリと岸本に見えて来た<sup>(4)</sup>」。

そして、岸本(藤村)は節子(こま子)を抱きしめながら、この決意について「好事がある。まあ明日話して聞かせる<sup>(5)</sup>」と囁く。この「好事<sup>よ</sup>」という言葉、確かに藤村にとってはそうかも知れないが、後日、その内容を聞かされた節子は、それを一体、どのように受け取ったのだろうか。『新生』において、節子は「叔父さんはさぞ嬉しいでしょうねえ<sup>(6)</sup>——」と皮肉を含んだ言葉を口に出している。

そこには、自分のことしか考えず、まるでこま子のことなど眼中に無い岸本への精一杯の抵抗が感じ取れる。しかし驚くべきことに、この言葉を受けて岸本は「叔父の外遊をよろこんでくれるらしいこの節子の短い言葉が、あべこべに名伏しがたい力で岸本の心を責めた。何か彼一人が好事でもするかのように。頼りのない不幸なものを置去りにして、彼一人外国の方へ逃げて行きでもするかのように<sup>(6)</sup>」と自身の行為を正当化したうえで、後ろめたさを感じるという藤村らしい巧みな<sup>レトリック</sup>修辞を施している。

しかし、藤村が姪の妊娠から出産へと続く難題を「災い」、そして彼女の両親に対する告白と謝罪を「厄介事<sup>やつかいごと</sup>」と考えていたことは疑うべくもない。とにかく、この現実から一刻も早く逃れたい一心だったわけで、それは「こま子のお腹<sup>なか</sup>が目立つようになる前に出発したい」という言葉に顕著に表われている。

一旦、決意すると、藤村の動きは速かった。間髪を入れずにヨーロッパへの旅費や滞在費、日本に残した子供たちの養育費の工面に奔走するのである。まず、自費出版していた『破戒』や『春』『家』など小説四編の版權を、新潮社に破格の二〇〇〇円という高値で買い取ってもらっている。

さらに中央公論とは、フランスから小説二編を送稿するという執筆契約を交わし、その原稿料を前借りしている(筆者注：これについては約束を履行せず、同社を激怒させた)。また、東京朝日新聞には定期的に「フランス便り」を送稿することで合意した(筆者注：これは実行され、その都度、原稿料が支払われた)。それに加えて、それまで買い集めていた膨大な数の蔵書や

はおりはかま  
羽織袴など高価な和服類のすべてを売り払って現金化している。

残された子供たちの養育はこま子の父親である次兄、広助に託し、その生活費はパリから送金することにしたが、このような徹底した財産整理を見ると、藤村には二度と故国に戻って来ないという覚悟のようなものが窺われる。

このようにして洋行の準備は万端整ったが、肝腎のこま子との関係、そして出産という大事が待ち構えていることについて、依然として藤村は彼女の両親に口を閉ざしたままだった。それだけの勇気が無かったわけで、ここに藤村という人間の常人には推し測ることの出来ない心の闇と弱さを垣間見ることが出来る。

### ●パリ逃避行の選択、『懺悔録』と『芭蕉全集』の携行

当時、文人の洋行先としては、圧倒的にイギリスが多数を占めていた。しかも藤村の場合、教師をするほど英語が堪能だったわけで、何故、イギリスではなくフランスを選んだのであろうか。

これについて、正宗白鳥は「酔余の煽動言に依る」とパリ行きを熱心に勧めた人物の存在を指摘している。その人物というのが、長野県松本市の資産家で文学にも造詣の深い中沢臨川(『新生』では「元園町の友人」として登場)で、彼は藤村と同郷であるばかりか、後見人のような存在でもあった。当時、在野ながらトルストイやベルグソン、ロマン・ロランなどの研究に没頭し、彼らの作品を日本に紹介したことで知られる。その中沢が、藤村に渡仏を熱心に勧めたというのである。

それに加えて、藤村が小諸義塾で教鞭を執っていた時、同僚だった三宅克己と丸山晚霞という二人の美術教師が、ともにパリ留学経験者だったことも影響したと思われる。つまり、藤村は事あるごとに二人から“パリ讃歌”を吹き込まれていたわけで、これについては河盛好藏も「彼らからパリにおける画家たちの自由に楽しく、またあまり金のかからない生活の話が聞かされて、それに一種のあこがれを抱いていた」「藤村自身も非常に

美術の愛好家であったこともフランスを選ばせた理由の一つであった」と述べている<sup>(7)</sup>。

また、渡航手続きから船便、パリでの下宿の手配など、藤村のフランス行を全面的に取り仕切ったパリ帰りの画家、有島生馬(『新生』では「番町の友人」として登場)の存在も抜きにしては語れない。彼は小説『或る女』の作者、有島武郎の弟だが、藤村の『千曲川のスケッチ』の装丁を手掛けたことから分かるように、若い頃から藤村の親友だった。

一九一三(大正二)年三月二五日、藤村は東京・新橋停車場を発って洋行の途に就くことになるが、この時、藤村は四十二歳。青雲の志を抱いて西洋を目指すには、少々、歳を取り過ぎているが、停車場には僚友の田山花袋や正宗白鳥、徳田秋声、吉井勇といった文壇の錚々たる面々<sup>そうそう</sup>、さらに新聞社や出版関係者たち約一〇〇人が見送りに駆けつけた。本来なら、晴れ晴れとした旅立ちであるはずだが、実際はスキャンダルからの逃亡だったこともあって、藤村の表情に笑みは無く、どちらかというと暗く沈んでいた。しかし、この異変に気づいたり、その理由を知る者は誰一人いなかった。

途中、鎌倉と箱根に寄り道して、二七日に出航地である神戸に到着する。とはいっても、乗船予定のフランス船の出航は十七日も先のことである。逆算すれば、東京を十九日も前に出発したことになるわけで、それほど藤村はスキャンダルの露見を恐れ、それからの逃避を図ったのである。宿泊していた神戸の旅館には、こま子の父親で次兄の広助が見送りに訪れているが、この時も藤村が「事実」を打ち明けることはなかった。

そして四月一三日深夜、藤村はフランス客船「エルネスト・シモン号」で日本を離れ、洋上の人となる。『新生』によると、岸本(藤村)は船が上海を出航し、香港に向かう段になって、やっとに節子(こま子)との関係や妊娠のことを義雄(広助)宛の手紙に認め<sup>したた</sup>、それを香港から投函している。元来、出発前にそのことを打ち明け、衷心から許しを請い、自分の子を宿したこま子の出産について相談しておくべきだったが、「その当たり前の

ことが藤村には出来なかったのである。

### ●シモネエの下宿屋、マダム・ムルネタスからフランス語を習う

三十七日間の船旅を経て藤村は五月二〇日、フランス南部のマルセイユ港に到着する。この美しい港町と古都、リヨンを二日間、見て回った後、二三日の早朝に終着駅のパリ・リヨン駅に着く。そして、有島生馬が手配してくれていたポール・ロワイヤル通り八六番地にあるマダム・シモネエ（本名マリー・シモネエ）の下宿屋へ馬車を走らせ、そこで旅装を解くのである。

その下宿屋はセーヌ左岸にあり、すぐ近くにリュクサンブール公園や天文台、カルチュラタンやサン・ミッシェルの学生街、さらに少し足を延ばせば芸術家たちが屯するモンパルナスにほど近い街区にあった。下宿屋が入った建物は七階建てで、一階が煙草屋とカフェ、そして三階の五室がシモネエが所有する長期滞在者向けペンション（下宿屋）になっていた。パリ留学中、ここに滞在していた有島生馬の紹介でやって来た藤村だが、彼も約三年にわたるパリ滞在の大半を、ここを“我が家”として過ごすことになる。

ところが、到着したばかりの藤村は、まさに神の采配としか思えぬ“偶然”に遭遇する。自分の子供を身籠った姪を日本に捨て置き、やっとその厄介事から逃れて“安住の地”に辿り着いたと思ったら、部屋の窓の外には通りを挟んで産婦人科病院の威容が彼を睥睨していたのである。

この下宿屋は宿泊費が廉価だったこともあって、部屋には電燈が引かれておらず、読書をするにも薄暗いランプの光が頼りという劣悪な環境だった。しかし、出不精の藤村にとってありがたかったのは、毎日、外出して食事をするという煩わしさのない「賄い付き」だったという点である。

元々、信州の田舎育ちだった藤村にとって、このような生活は仄々とした幼少期を思い出させ、一種のノスタルジーに浸りながら寛ぐことが出来たのかもしれない。実際、その部屋では普段着の着物に丹前、そして靴の

代りにスリッパという「花の都」らしからぬ姿で過ごすのだった。しかも、藤村は途切れることなく安物の煙草<sup>たばこ</sup>を吸い続け、室内はいつもその煙が充満していたこともあって、後年、シモネエが日本人から藤村のことを尋ねられた際、「ああ、あの煙草の紳士」と答えたのも宜<sup>むべ</sup>なるかなである。

先にこの下宿が食事付であることを述べたが、藤村はシモネエが毎日、作ってくれる田舎風の家庭料理が大いに気に入っていた。濃厚なポタージュスープに肉や野菜がたっぷり入った煮込み料理が定番だったが、後にすぐ近くの安ホテルに滞在することになった経済学者の河上肇をはじめとする大学研究者たちも、夕方になるときまってこの下宿屋にやって来て、藤村と一緒に彼女の料理に舌鼓を打つのがあった。シモネエは日本人宿泊者たちが礼儀正しく、しかも清潔好きで部屋をきれいに使ってくれるため好感を抱いていたという。

このようにパリでの生活が始まると、藤村は当初、永住を覚悟していたこともあって、フランス語の必要性を痛感する。「私は自分の旅窓から巴里を望んで見て、一つの大きな倉庫<sup>たぐら</sup>に譬えたことがある。この倉庫を開くには、どうしても言葉だと思った」というわけで、早速、英語を話せるフランス語教師を探すことになった。そして、運よく下宿から歩いて通える天文台近くに適任者が居ることが分かった。「マダム・ムルネタス」という老婦人がその人で、受講料は一時間二フラン、モーパッサンの短編集がテキストというのも気に入り、以来、帰国までの間、日曜日を除く毎日、藤村は彼女の元に通ってフランス語の読み書き、そして会話の研鑽に励むのだった。

四十歳を過ぎてから外国語を習得するのは多大な困難が伴うものだが、「語学の稽古ほど今の自分の心は無邪気にするものはない」と語っているように、藤村にとってフランス語の勉強に没頭する間は、暫し、忌まわしい過去を忘れることが出来た。

そして、この女性教師が余程、気に入っていたのか、藤村はパリにやって来た多くの日本人に、彼女の元に通ってフランス語を習うよう積極的に

勤めている。一九一四(大正三)年二月に来仏した河上肇、さらにその翌年末にロンドンからやって来た作家、水上瀧太郎もそれに従って通っている。水上の回顧録によると、彼はこの女教師を「ムルネタス嬢」と呼び、その容姿について「骨格のたくましい赤ら顔の、口髭くちひげの生えたお婆さんだった」と書いている。

### ●次兄からの手紙、焼き捨てたこま子からの手紙

パリ到着後しばらくして、藤村の元に次兄の広助から手紙が届く。こま子とのことを告白した藤村の手紙に対する返事で、『新生』を引用すると、義雄(広助)は「お前が香港から出した手紙を読んで茫然自失するの他はなかった」「出来たことは仕方がない、お前はもうこの事を忘れてしまえ」「母上はもとより自分の妻にすらも話すまいと決心した」という予想外に寛容な内容だった。そして、生まれて来る子供は遠くへ里子に出すから安心せよとも付け加えられていた。

つまり、藤村が引き起こした近親相姦という倫理に背く行為を、その出産も含めてすべて闇から闇に葬り去るから、お前の恥が世間に露見したり、社会的名誉が毀損きそんされるようなことは無いというのである。それは、乙女おとめ心が傷ついたであろう自分の娘に対する配慮よりも、藤村を頂点とする「島崎家」の体面を優先する処置で、これを読んだ藤村は胸を撫で下ろし、世事の処理たに長けた広助兄に感謝の念を抱いたことは間違いない。兎にも角にも、最悪の事態を脱することが出来たわけである。そのような安堵の成せる業だったのか、一件落着いたはずの当人、こま子から手紙が送られて来るのを疎ましく思い、不快感すら隠さなくなる。実際、『新生』において藤村(岸本)は「姪めいから貰った手紙ばかりは焼捨てるとか引裂いてしまおうと、かして、岸本はそれを自分の眼の触れるところに残して置かなかった。蔭ながら彼は節子に願っていた。旅にある自分のことなぞは忘れて欲しい」と心境を吐露している。<sup>(9)</sup>

何の憂いも無く、希望に満ちた新鮮な気持ちで「花の都」の生活をス

ターゲットにしたいのに、忌まわしい過去を引きずったこま子からの便りは“余計なお世話”だったのである。それ故、藤村は彼女の手紙を悉く焼き捨て、返事を出すこともなかった。

藤村という人間は、このように極めて偏った自我の持ち主で、それは作品に反映されているように自己に対する凄まじいまでの凝視、そして冷徹な自己中心主義という人生観に収斂されて行く。それ故、小説のためには家族や親戚、そして自身の恥じ入るべきプライバシーを暴露することすら厭わなかったのである。こま子との件もその例外ではなく、亀井勝一郎は「自己の青春を反芻する。自己の苦惱を反芻する。罪の意識の深さにむすびついてゐるが、他方ではそれは自己の宿命への陶醉とさへ感ぜられる」と、こま子に対する配慮よりも自身の運命を優先して考えていたと分析する。

つまり、藤村はパリで日々、懊惱し贖罪の念に捉われたとしているが、実際は自身の罪科が咎められることのない安住の地において、自分が犯した近親相姦という行為を島崎家の血の成せる宿命と達観したり、それに自己陶醉すらしていたと考えるのである。その結果、こま子に対する贖罪感が希薄化するの<sup>うが</sup>は当然で、穿った見方をするなら、この頃から衝撃的で甘美な宿命というべきこの“事件”の小説化が脳裏を過っていたとしても不思議ではない。

この年の八月、こま子は母親の目の届かないところで密かに男児を出産し、その赤ん坊は直ちに茨城県へ里子に出されてしまう。しかし、そのような生々しい現実<sup>よき</sup>は藤村の関心事ではなかったのである。

### ●ひたすら自室に籠って安寧を享受

藤村が逃避先として選んだパリは、彩り鮮やかな文化や芸術、学術、思想、そして知性が見事に融合した「この世の理想郷」ともいうべき街だった。世を忍ぶ者にとっても、其処は居ながらにして極めて質の高い知的刺激が享受できる最高の隠れ家だった。しかし、藤村は高名な詩人であり小



説家だったため、在留邦人の間でその滞在の事実が知れ渡って行くのは時間の問題だった。

ところが、知られたくない“秘密”を抱えて日本を脱出して来た藤村にとって、彼ら同胞と交流することを秘密保持の点から出来る限り、避けたいと思っていた。そのような当時の藤村について、武者小路実篤は「藤村は遂に孤獨の人で、自分の方から近づきたい人とも近づけなかつたし、近づいてもらいたかつた人とも近づけなかつた人ではないか」と述べているが、当時の藤村は「排他的」と批判され、孤立を深めたとしても一向に構わないという覚悟だったのではなかつたか。

そのような思いで藤村は自室に閉じ籠り、余程の事が無い限り、外出を控えて執筆に専念していた。そして、パリ到着から約一カ月が経過した六月一日、旧知の仲である劇作家、小山内薫が藤村の下宿にやって来る。彼は前年の末に日本からモスクワに渡り、その後、バルリンやストックホルム、ロンドンなどで舞台演劇を見て回り、半年間にわたる欧州観劇旅行の仕上げとしてパリに来たのである。

もちろん、小山内が藤村の“秘密”を知る由もなかつたが、藤村がこの「芸術の都」に居ながら観劇をしていないことに驚き、早速、オペラ座に連れ出している。そこでグノウの歌劇『ファウスト』を鑑賞するのだが、藤村は初めて訪れたオペラ座の絢爛豪華けんらんこうかさに息を飲む。「金泥きんでいで塗られた彫刻の飾りは寂びた古色を帯びて、この劇場が造られた頃の王朝時代の栄華を想い起させます」、そして、眼前で乱舞する踊り子たちについて「ドガの絵から抜け出して来たようだ」と述べている。このように大いに感激するのだが、一家言のある藤村は当日の演目である『ファウスト』について「生気を感じなかつた」と辛口の批評を下している。

さらに、二人は落成したばかりのシャンゼリゼ劇場を訪れ、そこでニジンスキーとカルサヴィーナのロシア舞踏劇とラヴェルの『ダフニスとクロエ』を鑑賞している。この二演目については、オペラ座の時とは打って変わって、藤村は「蘇生いきかえったように成った」と激賞するのである。

小山内がパリを去る前夜、藤村は彼のためにモンマルトルのカフェでさやかな送別の宴を催し、藤村にしては珍しく朝方まで痛飲しながら演劇論を交わしている。そして六月二四日、小山内はパリを発ち、シベリア鉄道経由で帰路に着くが、彼の訪問は藤村にとって一服の清涼剤となった。つまり、それまでは内に籠った陰鬱な気持ちで暮らしていたが、以来、日常生活の中に芸術的刺激という燭光が灯されることになる。

それから間もなくして、西洋美術史を研究していた沢木梢(本名・四万吉)がドイツから、そして劇作家の萱野二十一(本名・郡虎彦)が日本から、それぞれシモネエの下宿にやって来る。沢木は慶應義塾を卒業した後、ヨーロッパに長期留学中で、藤村より十四歳年少だった。帰国後、慶應大学の文学部教授に就任し、日本を代表する西洋美術史の大家になっている。

一方、萱野は「白樺」の同人で、藤村より十八歳年少。パリに一月間滞在した後、ロンドンに渡って劇作家として精力的に活動する。それが功を奏してイギリス演劇界で注目される存在となるが、スイスで病没している。シモネエの下宿に滞在している時も、萱野はしばしば発熱し、それを強い酒で紛らわせていた。藤村はそれを諫め、日本から持参して来ている熱冷ましを薬を与えて飲ませたというが、その病をついに克服することが出来なかったのである。このように、芸術的好奇心が旺盛な若者と同じ屋根の下で暮らすことは、藤村のパリ生活に活力と潤いを齎すことになった。

しかし、藤村だけしか認知し得ない衝撃的な“事件”も起きている。それはある日、沢木が何気なく口にした「医学の進んだドイツでは、インセスト(近親相姦)に走る人間には、脳に病的な特異性があるとされている」という言葉である。当然のことながら、藤村とこま子の近親相姦の事実を沢木が知っているはずはなかったが、島崎家に纏わる「黒い血」に怯えた藤村にとって、この言葉を耳にして激しく動揺する。薄々そうではないかと不安に駆られていただけに衝撃は大きく、そのシーンは「その言葉が英語の incest を意味していて、偏った頭脳のもの間に見出される一つの病的な特徴であると説明された時は、そんな言葉を聞いただけでもぎよ

つとした」と『新生』にも登場させている。

パリ滞在中、藤村は主として東京朝日新聞にエッセイ風の「パリ通信」を定期的に通稿している。「巴里の旅窓にて」（一九一三年八月二七日付、三回）を皮切りに、帰国前年の「人形芝居」（一九一五年八月二八日付、三回）に至るまでの計一二四本のパリ通信「仏蘭西だより」がそれで、それらの原稿は後にまとめて『平和の巴里』として刊行されている。

小説でもないこれらの原稿を書き続けたのは、日本に残した子供たちの生活費と自身の滞在費を賄うための方策であって、朝日新聞はそれらの原稿料を掲載の都度、パリの藤村の銀行口座に振り込んでいる。藤村は送られて来た原稿料の中から、必要額を東京の留守宅を預かってきている次兄、広助の元へ送金している。それはお金に関してルーズだった広助をあまり信用していなかったこともあるが、藤村の吝嗇りんしよくさに加えて、何から何まで自分が管理しなければ気が済まない几帳面さに由縁するものでもあった。

### ● 「巴里村の村長」と命名され、急速に広がる交遊

藤村が好むと好まざるとに拘わらず、彼のパリ滞在は多くの在留邦人の知るところとなり、先の沢木梢や萱野二十一、さらに考古学者の浜田耕作や経済学者の河田嗣郎といった研究者たちも藤村と交流を深めることになる。そして、パリにおける藤村交遊録の中でとりわけ際立った存在だったのが、熱い情熱を胸に「芸術の都」で見果てぬ夢を必死になって負い掛けていた若き画学生たちだった。

彼らの中で、藤村がもっとも親密にしていたのが十歳年下の山本鼎かなえだった（『新生』では「岡」として登場）。彼は世界中からやって来た貧乏画学生の巣窟そうくつであるシテ・ファルギエールに借りたアトリエで起居していたが、そこから徒歩で度々、シモネエの下宿を訪れ、異国生活で何かと不自由を強いられている藤村の手助けをしている。それについて、藤村は「山本君が古い湯沸しとアルコールランプを持って来てくれたので、私の部屋でも茶

を入れることが出来るようになった、私の贅沢はこの巴里に居てふるさと懐かしい緑茶の香りでも嗅いでみるくらいなものであった」という一文を残している。

彼は東京美術学校(現東京芸術大学)西洋画科を卒業した後、盟友の石井柏亭らと雑誌「方寸」を創刊する。そして、程なく柏亭の妹と結婚を約束する恋仲となるが、こともあろうに柏亭がそれに猛反対したため破談となる。親友に裏切られた山本は激しく憤って柏亭と絶交、そしてそのあまりにも哀しい出来事を忘れるためにパリにやって来たのである。その時、彼は三十一歳。絵の勉強するには少々、歳を取り過ぎており、しかも悲恋からの逃避行ということもあって、絵の修行にはあまり身が入らず悶々とした日々を送っていた。

そのような心の内を明かされた藤村が自分の境遇と似ていると思って、山本に同情心とともに親愛の情を抱いたとしても不思議ではない。一方、山本は藤村が似たような理由でパリにやって来たことは知らなかったが、文学の大御所が親しく接してくれることに畏敬の念を抱き、いつしか藤村を「<sup>パリ</sup>巴里村の村長」、そしてシモネエの下宿を「(日本人の)村役場」と呼ぶようになる。

『新生』には、その藤村と山本が女性問題とパリ逃避行について語り合う場面がある。岸本(藤村)がある留学生について「国の方で深くねんごろにした一人の若い人妻があった」「その婦人は現に人の妻である<sup>(13)</sup>」、そして「私費で洋行を思立った留学生が日本を出る動機の中には、すくなくともその若い夫人との関係が潜んでいるらしい<sup>くちぶり</sup>口振であった」「その夫人の妊娠ということにも留学生は<sup>ひど</sup>酷く頭をなやましていた<sup>(13)</sup>」と話す場面で、それに対して岡(山本)が自身の体験を想起しながら「女のことで西洋へ来ないようなものは有りゃしません<sup>(13)</sup>——」と多少の自嘲と怒気を含んだ声で応えている。

一方、岸本(藤村)は自分も似たような事情でパリに逃げて来て<sup>ちつきよ</sup>蟄居しているというのに、この留学生がまるでドンファン(漁色家)でもあるかのよ

うに誇らしげに人妻との情事を語っていたことに腹を立て、そんな不平等なことがあって良いのかと反発するのである。

### ●パリにおける憩いの場としてのカフェ「シモンヌの家」

それら日本人画学生たちと藤村が親しく語り合う隠れ家的存在だったのが、リュクサンブール公園入口近くにある鄙びたカフェだった。何の取り柄も無い小さな店で、何時行っても客の姿は疎らだったが、それが東洋からやって来た異邦人たちにとって居心地の良い絶好のオアシスとなった。

このカフェには、「シモンヌ」という名の一六、七歳の美少女がいた。店主の娘で、いわば看板娘のような存在だったが、血気盛んな日本人画学生の中には、この純情可憐なパリジェンヌに心惹かれて、仄かな恋心を抱く者もいた。このカフェは『新生』にも登場しており、そこでは岡(山本)がシモンヌに心を寄せていることを見抜いた岸本(藤村)が「(東京で：筆者挿入)別れた意中の人の面影を僅に異郷の少女に忍ぼうとしているかのように見えた」と書いて<sup>(14)</sup>いる。

「シモンヌは細腰で、巴里の娘らしい風俗がいかに好く似合っただけ」と彼女の印象を綴っている藤村だが、元々、若い女性が好みであるだけに、山本と同様、シモンヌに好意以上の気持ちを抱いていた可能性もある。ひょっとすると、彼女の中にこま子の面影を見出そうとしていたのかもしれない。いずれにせよ、日本人グループの間で彼女がマドンナ的存在であったことは間違いなく、藤村も含めて彼らはこのカフェを「シモンヌの家」と呼んでいたのである。

実際、途轍もなく華やかで煌びやかな「花の都」において、東洋人が平常心で暮らすのは至難の業である。当然のことながら、生活慣習の違いや言葉の壁、そして肌の色の相違に起因する人種差別もある。その意味において、街中にありながら寂れたこの小さなカフェは、日本人同胞たちが心置きなく寛げる癒しの場所だったのである。

河盛好蔵は「この隠れ家をえてから藤村のパリ生活は漸く落ち着きをえ

たように感じられる<sup>(15)</sup>」としたうえで、「シモネエの下宿といい、この『シモンヌの家』といい、パリのなかに隠されているよき農民的なもの、よき農村的なものに藤村が恵まれたのは藤村のパリ生活を支える陰の力になっていた<sup>(15)</sup>」と分析している。つまり、このカフェやシモネエの下宿をパリという大都会の中における農村、つまり「田舎」のような空間と考え、そこには日本的なるものが入り込む余地があったため、藤村は生氣を取り戻すことが出来たと推察するのである。

### ●生真面目な藤村と破天荒な藤田嗣治との邂逅<sup>かいこう</sup>と「ある事件」

これら藤村が親しく付き合うようになった画学生の中に、後にパリで大成功を収める伝説の画家、藤田嗣治の若かりし姿もあった。彼は藤村より二カ月ばかり遅れてパリにやって来たが、到着後すぐに紹介状も面識も無いのにアカデミー・ジュリアンで洋画を学んでいた川島理一郎のアトリエを訪ねている。

その時、応対した川島の身なりが後の藤田のファッションに少なからず影響を与えたと思われるが、その服装はギリシヤ風の寛衣に石のネックレス、頭には豹草<sup>ひょうがわ</sup>の縁なし帽、そして腰紐<sup>こしひも</sup>という奇妙奇天烈な<sup>きみょうきてれつ</sup>ものだった。パリにおける藤田の服装や髪型はパリっ子も度肝を抜かれる奇抜なものだったが、その原点がここにあった。要するに、藤田と川島は破天荒という点において似た者同士だったのである。その日から藤田は川島の画室<sup>かいしつ</sup>に居候<sup>きこう</sup>を決め込むが、当時のパリには安井曾太郎や小林万吾、満田国四郎など一五、六人の日本人画学生がいて、互いに切磋琢磨すると同時に、不自由な異国での生活を支え合っていた。

藤村はこの藤田とも交流を重ねることになるが、生真面目と破天荒といった極めて対照的な性格ゆえ、二人の間で親密な友情が芽生えることはなかった。実際、それを象徴するかのような“事件”が起きている。

一九一三(大正二)年も押し迫った一二月末のある日、藤村や山本、藤田など十三人がソルボンヌ大学理学部に留学中の福見尚文(帰国後、東京大学

助教授に就任)のアパートで開いた忘年会での出来事だった。板張りの床に座布団を敷き、車座になって福見の妻、キクが用意した手作りの日本料理に舌鼓を打つと同時に、日本酒やワインなどが振る舞われ、宴は大いに盛り上がった。若い画学生たちの中にはアルコールが入ると踊りだす者まで出て、まさに無礼講のドンちゃん騒ぎとなった。

その主役は当然のことながら藤田で、川島の薫陶を受けたのか、皆が啞然とするような激しいギリシャ踊りを披露する。しかし、狭いアパルトマンの一室で、しかも酔いも手伝ったのか、藤田は突然、バランスを崩し、藤村のすぐ近くにあったストーブの上のヤカンをはひっくり返してしまう。そして、ヤカンの中で煮え滾っていた熱湯が、神妙な面持ちで座っていた藤村と隣の山本の身体に降りかかったのである。

部屋の主である福見は大慌てで二人を近くの薬局まで連れて行き、そこで火傷の応急手当を施してもらう。そして、再び福見のアパートに戻ってみると、“事件”の張本人である藤田は特段、悪びれた様子も見せず、奇声を上げながら踊り続けていた。その姿を目の当たりにして、さすがの藤村も慥然としたに違いないが、その時の様子を目撃していた福見キクは「藤村は大そう陰気で無口な、人づき合いのいい人ではなかったもので、若い画家たちからは敬遠されていた」(「エトランゼエ時代の島崎藤村」という意外な一文を残している。

つまり、藤村は彼らと仲睦まじくやっているつもりだったが、内情はいささか違っていたというのである。それら画学生の中で藤田はひと際、反骨精神が旺盛かつ傍若無人であっただけに、「大家」然として澄まし顔の藤村を内心、疎ましく思っていたのかもしれない。勿論、そのことと、この“事件”には何の因果関係もない。いずれにせよ、その火傷はかなりの重症で、藤村は以後、二週間、高熱が続いて寝込んでしまい、日本へ送る予定の原稿が滞ることになってしまったのである。

## ●河上肇との出会いとドビュッシー音楽をめぐる論争

一九一四(大正三)年二月、経済学者で京都帝国大学助教授の河上肇が、同僚で商法学者の竹田省さとると共にブリュッセルからパリにやって来た。二人は大使館の紹介で宿泊先としてシモネエの下宿を訪れたが、生憎あいにく、空き室が無かったため、藤村が近くの「グランド・オテル・ド・ルクサンブール」という名前だけが立派な安ホテルを紹介する。このホテルにはその後もなく、東北大学の物理学者、石原純も合流している。

三人は夕食時になると決まってシモネエの下宿を訪れ、藤村と一緒に食卓を囲むことになる。それぞれ専門分野は異なるが、三人とも青春時代にロマン溢れる藤村の詩に魅了された過去があり、詩人としての藤村に畏敬の念を抱いていた。真面目一徹で、プライドの高い藤村の性格からすれば、先の忘年会の“火傷事件”に象徴される無頼派の画学生たちより、この三人と接している時の方がはるかに心穏やかだったに違いない。

河盛好蔵も「それまで血気さかんな、しばしば粗暴でもある、文学的教養の乏しい、若い画家たちばかりとつき合っていた藤村にとっては、初めてお互いに理解し合い、対等に話し合える友人をえたわけで、彼は少なからず快い知的刺戟を与えられたにちがいない<sup>(16)</sup>」と述べている。そして毎夕、食事を提供したシモネエも、彼らの礼儀正しさと教養のある紳士然とした態度にいたく感心したのである。

パリにおいて、藤村が最も心魅かれた音楽はクロード・ドビュッシーのメロディーだった。それは印象主義音楽と称される魅惑的なもので、パリ滞在中、藤村はそのコンサートにしばしば足を運んでいる。そのドビュッシーについては、藤村より前にパリにやって来た永井荷風もその楽曲に陶醉した一人で、彼は帰国後、ドビュッシー音楽に関する論文を発表して高く評価されている。

その至高の音楽を是非とも河上らに聴かせたいと考えた藤村は一九一四(大正三)年三月二日の夜、河上と竹田を連れて彼のコンサートに出掛けられている。当夜、演奏された曲目は「亜麻色の髪の乙女」などのピアノ曲だ



ったが、ドビュッシー自身が指揮するという幸運に恵まれた。日本では味わうことの出来ない素晴らしい音色に酔い痴れた三人は、宿に帰る途中、天文台近くの「カフェ・リラ」に立ち寄って、その感動的な演奏について熱く語り合うのだった。

まず、口火を切ったのは河上で、開口一番「パリに来た中で今までにない晩だった」「旅の土産話が一つ増えた」と興奮を隠し切れずにドビュッシーを絶賛する。それを聞いて、藤村は「折角、誘った甲斐があった」と大いに喜ぶが、その後、議論は思わぬ方向へと発展して行く。

しばし語り合った後、河上が徐に次のような問題提起をしたのである。「その夜聞いたような音楽、左様いう趣味、またそれを聞きに集まる一部の階級の人たちがあることは認めるけれども、それが民衆の性質を表すものではない<sup>(17)</sup>」。つまり、ドビュッシー音楽そのものの芸術的価値は高く評価するが、そのような素晴らしい音楽を鑑賞できるのは、このフランスにおいて一握りの限られたブルジョアジーに過ぎないのではないかとすれば、このような階級社会は大衆の視点から大いに問題があると言わざるを得ない—というのである。

その夜の興奮が鎮まり始めた頃、俄かに反骨心旺盛な学者魂が頭を擡げてきて、議論の焦点が純粋な音楽論から社会体制論へと転化したのである。思わぬ展開に、藤村も反論する。「一部の少数な最も進んだ人たちがあってやがて時代というものを導いて行くのではないのでしょうか、左様いう人たちが代表しないで誰が民衆の精粹を代表するのでしょうか、個人の力というものが其様々に認められないのでしょうか<sup>(17)</sup>」。

穏健と隠忍自重を心情とする藤村にしては、珍しく激した反駁である。しかし、折角の素晴らしい夜を台無しにしないために、「小さい反抗心は捨てようではありませんか、もっとヨーロッパから学ぼうではありませんか<sup>(17)</sup>」と宥めるように河上に語り掛け、論争に終止符を打とうとする。河上はそれを渋々、受け容れるが、腹が収まらなかったのか、語気を強めて「(日本人の：筆者挿入)愛国心というものを忘れないでいて下さい<sup>(17)</sup>」と申し渡し、

一件落着となったのである。

### ● 「模倣は多きを憂えない」とする藤村の西洋受容論

これらの遣り取りから明らかなように、藤村は西洋世界で素晴らしいと思ったものがあれば、それを素直に受け容れるべきとする開明的な考えの持ち主だった。そのような姿勢は、国粹的な愛国主義者たちから「西洋被<sup>かぶ</sup>れ」と揶揄<sup>やゆ</sup>されることが多かったが、藤村はそのような批判を物ともしない堅固な信念を持っていた。そして、それら吸収した西洋はいつの日か、必ずや日本的なるものに変容して根付くに違いないと考えていたのである。

それを裏づけるかのように、藤村は「模倣は多きを憂えない。むしろその力の薄弱なるを恨みとする。模倣力が薄弱なる場合には、他の好いものに冷淡なることも出来なければ、またそれを真に受納<sup>うけい</sup>れて自分のものとする<sup>(18)</sup>ことも出来ない」と西洋の模倣を積極的に推奨している。そして、ロシア人が西洋を積極的に吸収し、模倣して世界に誇るべきロシア文学を誕生させたことを、その象徴的な成功例として挙げるのである。

藤村のこのような西洋受容論は、実は夏目漱石のそれと軌を一にしている。それについて、十川信介は「(藤村が：筆者挿入)固執するのは漱石のいわゆる『内発性』(『現代日本の開花』)の『芽』を探り、ヨーロッパ文化と接合させることにあった」「彼は漱石や鷗外のように深い認識を示したわけではないが、彼なりに自分の見聞を通じて和洋の溝に当面<sup>(19)</sup>していた」と論考しているが、漱石が藤村を高く評価したのも、このような共通の西洋観が根底にあったからかもしれない。

バリ滞在中の河上と藤村の間では、さらに激しい文明論が戦わされている。河上は、藤村の西洋受容の姿勢を「歴史と伝統を誇る日本人として恥<sup>かた</sup>ずべきもの」と一刀両断するが、それに対して藤村は「『現代の日本が結局欧羅巴の文明に達しようとするだけでは、私どもは満足しません。それでは到底欧羅巴人に<sup>かな</sup>叶いません。日本には日本固有の、全く欧羅巴と異なった、優秀な文明があると考えなければ、私どもの立場はなくなります。』

(河上は：筆者挿入)こういう調子の人です」と藤村らしい精一杯の皮肉で応酬している。

両者の見解の相違は公園論にも及び、藤村がパリの公園を美術品のようだと考えて、「そこには幾千という人と人との一大オーケストラの世界が展<sup>(21)</sup>けている」と讃辞を送ったのに対し、河上はそこには人工美があるだけで、大事な自然が欠落していると批判する。つまり、パリの公園はあまりにも芸術的意匠を意識し過ぎて、木々の配置を左右対称にしたり、過度に刈り込んでいることに強い違和感を抱き、それと比べると日本庭園には自然に対する畏敬の念があると讃美するのである。

このように不倶戴天ともいふべき二人だったが、その年の四月、河上がパリを去って帰国すると、藤村は好敵手を失って、随分、寂しい思いをする。

### ●日本人画学生や学者たちとアベラールの墓地に参詣

彼らと入れ代わるように、六月に入ると山本鼎と東京美術学校時代の同僚だった洋画家の正宗得三郎、森田恒友の二人がやって来る。この正宗は、藤村とともに自然主義文学を立ち上げた作家、正宗白鳥の次弟である。そしてその数日後、美術研究者である高村真夫がシベリア経由で到着している。彼らはいずれも、藤村を囲む「巴里村」の一員となったわけだが、それからしばらくして、藤村と山本はこれら新参者をカフェ「シモンヌの<sup>うち</sup>家」に連れて行き、日々、女らしさを増しているシモンヌに紹介している。

また、藤村と山本は正宗を伴って著名人が眠るモンパルナス墓地を訪れ、モーパッサンとボードレールの墓前に花を捧げている。そして、その足で「カフェ・リラ」に立ち寄り、公園の緑の木々を眺めながらワイングラス片手に談笑している。これは、「巴里村の村長」である藤村主催の新人歓迎会のようなものであるが、このような交流を重ねていくにつれて、当初のこま子に対する慙愧に堪えない悔恨の念や贖罪意識、さらに二度と故国の地を踏まないといった鬼気迫る覚悟がいつしか稀薄になって行くのであ

る。

その後、帰国した河上の紹介で京都帝大の経済学者、河田嗣郎や考古学者、浜田青陵、文学者、生田葵山<sup>きざん</sup>、さらに詩人の野口米次郎もシモネエの下宿にやって来る。また、河上が滞在していた向かいの安ホテルには、河田より遅れてやって来た同じ京都帝大の財政学者、神戸正雄が宿泊している。このように、日本のアカデミズムを代表する錚々たる顔ぶれが藤村の周辺に集まったわけで、河上の時と同様、夕食時のシモネエの食堂は再び、極めて知的水準の高い会話が交わされることになる。

藤村を取り巻く日本人は、シモネエの下宿を中心とするこれら大学研究者たちと、山本や正宗たち画学生グループの二つに大別できる。若くて無頼でアバンギャルド的な後者に対し、前者は比較的年齢層が高く、学識や良識、分別のある大人の集団で、藤村は両グループとバランス良く交流を重ねていたのである。

学識者グループの中で、藤村がもっとも親密にしていたのが河田嗣郎だった。彼の専門は農政経済学だったが、同時にパリの街角で熱心に絵筆をとる趣味人でもあった。ある日、藤村はこの河田助教授と神戸教授を誘ってパール・ラシェーズ墓地を訪れている。

そこでは一二世紀のスコラ派哲学者であり、神学者でもあったアベラールと、彼と終生、変わる事のない精神的な愛を貫いたエロイーズが眠る墓に詣でている。二人の数奇な恋物語を象徴するかのように、その墓は男女二人の寝像になっていた。藤村はこの二人の關係に強く心魅かれたと見え、『新生』で「彼(岸本：筆者挿入)はよく節子にあのアベラールとエロイーズの話をした」「彼女(節子：筆者挿入)が未だこの下宿へ通って来る頃には、あの僧侶と尼僧との伝説に關したものを見つけて置いてそれを彼女に読ま<sup>(22)</sup>した」と書いている。こま子にエロイーズのような存在になって欲しいと願っていたのかもしれない。

●高らかに謳い上げる「パリ讃歌」とエトランゼの悲哀

それでは、藤村はパリという街を一体、どのような眼差しで眺めていたのだろうか。それを端的に語る一文が「フランスだより」に掲載されている。

「『芸術の都、文明の泉源、風俗の中心、流行の中心』として<sup>フランス</sup>仏蘭西の作家が誇ったこの<sup>(23)</sup>巴里」<sup>みる</sup>「ここには極く古いものと極く新しいものとが同棲しております。非常に開けたことと非常に野蛮な感じのすることとが同棲しております。旧教と科学とが同棲しております。詩と散文とが同棲しております。こういうありあまるほどの矛盾を容れながら、全体として見ればいかにも沈着いた<sup>おちつ</sup>好い感じを与えるところが多くの旅人の心を引きくのでしよう」<sup>(24)</sup>「レニエーの文学を産み、ドビュッシイの音楽を産み、ルノアールの絵画を産み、ロダンの彫刻を産んだこの巴里へ来て、私は思いがけなくも現代に生き残った詩を見つけたような心地が致します」<sup>(24)</sup>「自由、博愛、平等——この三つの言葉は今の<sup>モットオ</sup>仏蘭西人の標榜です。彼らが座右の銘です」<sup>(25)</sup>「男でも女でもその眼は優しい」。

フランスという国に<sup>あふ</sup>満ち溢れているヒューマニズムとリベラリズムに共鳴し、その<sup>ユートピア</sup>理想郷に暮らす人々を羨ましく思っている様が、この文章から<sup>うかが</sup>如実に窺える。しかし、その一方で、日本人として、次のような異議申し立てもしている。

「こういう比較的寛大な民族の中にあつてすら、自分らは逢う人ごとにジロジロ見られるような厭な<sup>いや</sup>気持を忘れることが出来ません」<sup>(25)</sup>「自分らにはカミシモを着け長い刀を差している時分の攘夷家の遺風がまだ抜けきらずにあるのでしょうか。その強い御先祖の<sup>おかげ</sup>御蔭で<sup>ヨーロッパ</sup>欧羅巴の旅に来てまで<sup>こんな</sup>斯様に人一倍肩が張るのでしょうか」。

これは夏目漱石や永井荷風、高村光太郎など、西洋世界を体験した文人たちに共通する人種的な被差別感である。三人の中では、英仏語が流暢で背も高く<sup>おうよう</sup>鷹揚な性格だった荷風がそれほど打撃を受けなかったのに対し、ひと一倍エリート意識とプライドが高かった<sup>たんく</sup>短軀の漱石を襲ったコンプレ

ックスは想像を絶するほど深刻で、それに打ちひしがれて一時「発狂す前」にまで至っている。

藤村の場合、外界からの評価を左程さほど気にしない唯我独尊のような性格、つまり強靱な自我と自意識の持ち主だったこともあって、黄色人種であるが故の差別にそれほど痛痒つうようを感じなかったと思われる。どれほどフランス語を勉強しても、フランスという国に溶け込めず、またその一員になれないという歯痒はがゆさを感じていたのは事実だが、外国人に対する同様の現象は日本においてもあるわけで、藤村はそのことを踏まえたうえで一種の諦念のようなものを抱いていたのではなかったか。それ故、面と向かってフランスを批判するのではなく、カミシモや長い刀、攘夷家といった日本の「古い御先祖」を登場させて、自嘲気味に嘆息しているのである。

「私は異郷の客となって見て今更のように芸術の尊さをつくづくと感じました。そして異人種と異人種とが真まに互たがいに理解し真まに互たがいに美質を知り合うのに芸術ほど近くて正直な道はないということをしみじみ感じました。もしも欧羅巴ヨーロッパが吾儕われらの先祖の胸には恐ろしい幽霊のような『黒船』と聯想されたこともあったように、唯物質ただ的の威力を以て迫り来るようなもので、露西亞ロシアの文学も伝わらず、独逸ドイツの音楽も伝わらず、仏蘭西フランスの絵画も伝わらずとしたら奈何どんなものでしょう。欧羅巴人というものが真ほんとう実に吾儕われらに解(26)ったのは彼らの芸術が知られてからではないでしょうか。

このように人種間の相違もたらが齎あつれきす様々な軋轢を解消するためには、普遍的な価値を内包している芸術こそが重要な役割を果たすに違いないと考えるのである。

### ●「パリの街には響ひびきがあり、東京には声がある」

藤村はパリの公園を一つの芸術作品と讚美したが、それと併せてこの街そのものも自然に出来上がったのではなく、時の為政者が文化や芸術を愛してやまないフランス人を代表する形で、極めて綿密に設計意匠を凝らしたに違いないと考える。

「幾多の設計を承<sup>う</sup>け継ぎ承<sup>う</sup>け継ぎして建設せられたその整頓<sup>せいとん</sup>した街路や、建物や、町並木や、公園や、橋梁<sup>きょうりょう</sup>や、その他の工事の跡を考<sup>か</sup>えて見ますと、ある一つの意志<sup>いっし</sup>に依<sup>よ</sup>って成<sup>な</sup>ったかと思<sup>おも</sup>われるほど町全体として大きな建築物のような趣<sup>おもむ</sup>を見せております。こういう点<sup>てん</sup>から申<sup>ま</sup>せば巴里は確<sup>たしか</sup>に一つの傑作<sup>たしかな</sup>と存<sup>ぞん</sup>じます<sup>(27)</sup>」。

凱旋門から放射線状に延びるシャンゼリゼ大通りや、街中の要所要所に配置された広場と緑あふれる公園、さらに天を衝く数々の尖塔や噴水、銅像といった芸術的構造物が、個々の素晴らしさは言うに及ばず、全体として絶妙のハーモニーを醸し出している<sup>かも</sup>と絶賛するのである。時代を先取りする卓越した都市設計概念の存在を指摘しているわけで、そのような尊崇の念を胸に抱きながら、藤村は「パリ讃歌」を高らかに謳<sup>うた</sup>い上げている。

「一大樹園の感あるエリゼエの附近からコンコルドの広場、テュイルリー公園の石垣の側、ルウヴル王宮の窓の下を通った。黒い並木の幹の見える対岸<sup>たいがん</sup>の建築物の間を通して向うのソルボンヌの丘の方には古い寺院の尖塔<sup>せんとう</sup>を望んだ。あの辺はまるで石の建築のオーケストラだ。層々相重なる諧調<sup>かいちょう</sup>の結晶だ。全体として見て灰白な町の感じも好<sup>この</sup>い<sup>(28)</sup>」「サン・ミッセルの石橋の上にかかると、ノオトル・ダム<sup>フランス</sup>の寺院の古塔が桃色の夕日に染まるのを見た。自分は今更のように仏蘭西人の建築的才能と伝統を重んずる冷静な意志<sup>せいじょう</sup>とを思い、尊敬と羨望<sup>せんぼう</sup>の念を禁<sup>こ</sup>ずることが出来なかつた<sup>(28)</sup>」。

このような叙情的で華麗ですらあるパリ描写からは、藤村に特徴的な暗くて内向的で陰鬱な自己凝視の日常からは想像も出来ない青春の明るさが見て取れる。その意味において、藤村は逃亡先のパリで青春を取り戻し、洗練された芸術性を体現した巴里という恋人を手に入れると同時に、小説家という散文家からかつての詩情あふれる詩人<sup>よみがえ</sup>として甦<sup>よみがえ</sup>ったとも言える。そのような感性の成せる業なのか、この理想郷<sup>ユートピア</sup>を讚美しながらも、故国、それも東京を懐かしく思い出して、次のように熱い想いを寄せるのである。

「巴里<sup>パリ</sup>の町には響<sup>ひびき</sup>がある。東京の町には声<sup>こゑ</sup>がある。巴里の町にも声はないではないが、あの東京の方で聞<sup>き</sup>く勇ましい<sup>いっしやうり</sup>鱗<sup>つじょうらうり</sup>売<sup>うり</sup>の声や、花売<sup>はなうり</sup>辻<sup>つじ</sup>占<sup>うら</sup>売<sup>り</sup>の声

や、四季折々の物売の声に限らず、車夫は声を掛け、按摩は呼んで通り、押して行く荷車の前後にまで声があって、下町の空気の濃いところとなると流行唄、仮白遣い、広告の口上、飴屋の歌、その他数え切れないような彼の朝晩の賑かさに思い比べると、ここには彼ほどの声はない」<sup>(29)</sup>「全く、東京の町は声で満たされているような気がする。そのかわり、ここは響だ。人の代りに器械や馬の働く響が石づくめの町の空に揺れて来る」。

「町の並木は森のように茂っても蟬一つ鳴くのを聞きません。蝶もめつたに來ません。蛍も見かけません。夜明方に鴉が鳴いて通り、日の輝いた町の空に蜻蛉が群れて来るような光景は、ここでは見られません。あらゆる秋の悲みをあつめたような蟋蟀の歌が縁の下の方から通って来るなぞも、この石づくめの町にはないことです。ここには強い線があります。硬い質があります。垣根や葡萄棚のようなものまで鉄製です。一切が実に巖固で永久的です。人の心を傷みややすくさせるもの、センチメンタルにさせるもの、あるいは深く浅く無常観をそそるようなもの、左様という外界の現象がどうもここには少いような気がします」。

つまり、西洋を象徴するパリに心を奪われているのは事実だが、其処は自分が真底、馴染めるところではないという偽らざる本心を吐露しているのである。このようにパリに深くのめり込むにつれて、皮肉なことに日本的なるものの素晴らしさが身に染みてきたわけで、その結果、藤村は激しい寂寥感に襲われる。

その藤村が日本と西洋を考える際、大いに啓蒙を受けたのが幕末の外国奉行で慶応期にパリに滞在していた栗本鋤雲<sup>じょうん</sup>の存在である。彼は明治維新直前の駐仏公使で、近代日本を誕生させるという命を受けて派遣されたが、日本古来の伝統的な価値観や美意識、さらに武士的な気魄と倫理観を堅持しながら、自由と平等を規範にしたフランスの西洋的価値観を如何にして実現するか腐心する。つまり、類の無い「近代武士」だったわけで、その国境や時代を超越した鋭い眼差しは、当時、進行中だったパリ大改造に余すところなく注がれていた。



「近代」の構築現場を目の当たりにしたその貴重な体験は、一八六九（明治二）年に刊行された著書『暁窓追録』<sup>ぎようそうついろく</sup>に収められているが、若い頃、その鋤雲から教えを受けたことのある藤村は同書を日本から取り寄せて熟読している。そして、そこから「物に動ぜぬ偉大な気魄と、長い教養の効果と、日本人としてのプライド」（「街上」）を感じ取り、時代認識についても封建的な江戸と近代的な明治といったステレオタイプ化された固定観念の矛盾を学んでいる。つまり、江戸と明治を一九世紀という連続性のある時空間として捉えることの必要性を教えられたわけで、以来、藤村は鋤雲に代表される知的エネルギーの系譜を江戸末期にまで遡<sup>そきゆう</sup>及させて考えるようになる。

### ●第一次世界大戦との遭遇とリモージュへの疎開

若き画学生や大学研究者たちとの親密な交流によってパリ生活を楽しんでいた観のある藤村だが、一九一四（大正三）年七月に勃発した第一次世界大戦がそれを激変させる。ドイツ軍の侵攻によって「パリ占拠」の恐れが噂されるようになったため、藤村は下宿屋の主であるマダム・シモネエの出身地、フランス中部のリモージュへ疎開することになる。正宗得三郎など日本人画学生四人も同行したが、当地では日本がドイツに宣戦布告し、ドイツの租界地である中国・青島を攻略したこともあって、地元の人々は藤村たちに好意的な態度で接してくれた。

約二カ月半、当地に滞在した後、パリの安全が確認されたため、藤村は一月一七日にパリに戻って来る。先に帰着していた正宗と藤村は留守にしていたパリ市街を懐<sup>くま</sup>なく探索するが、その途中、藤村の馴染みの煙草屋に立ち寄ると、その奥さんは「召集された主人は足に大怪我をして野戦病院に入院しているが、片足を切断することになるかもしれない」と暗い表情だった。その足でカフェ「シモンヌの家」に向かったが、シモンヌは笑顔で藤村を迎えてくれたものの、召集された父親に話が及ぶと、彼女は眉を曇らせて「ベルギー国境近くの戦場に向かったまま行方知れずになっ

ている」とうなだれるのだった。

美しい田園に囲まれたりモージュで、まるでバカンスでも楽しむかのよ  
うにのんびりとした安寧<sup>あんねい</sup>の日々を送って来た後だっただけに、このような  
具体的な戦争の惨禍に触れた藤村は、それがわが身に降りかかった不幸の  
ように思えて、暗い気持ちになるのだった。それを象徴するかのように、  
この日のセーヌは厚い霧に覆われ、ノートルダム大聖堂も霞んで見えた。  
そして、美術館も博物館も劇場もすべて門を閉ざしていた。どの通りも閑  
散としており、時々、目にするのは、恐らく戦争未亡人であろう婦人が喪  
服に身を包んで娼婦と同様、客引きをしている痛ましい姿だった。

そして、この戦争体験で藤村が強<sup>おちむ</sup>く心を動かされたのが、多くのフラン  
ス人芸術家や作家たちが愛国心を昂揚させ、祖国防衛に立ち上がったこと  
だった。ペンや絵筆を置いて意気揚々と戦場に赴き、戦闘に参加していた  
のである。そのことを知ったのはパリ帰着後、入手した文学雑誌「メルキ  
ュール・ド・フランス」の記事で、そこには詩人のシャルル・ペギイ(享  
年四十一)をはじめとして戦死した文学者五十八人の名前が列挙されていた。

彼らの祖国愛にいたく感銘を受けた藤村だが、日本がこのような戦争に  
直面した時、日本人作家たちは果たして如何なる行動を取るのかと考える  
と、甚だ心許<sup>はなは</sup>ない気持ちになるのだった。フランスにおけるこのような戦  
争体験を踏まえて、藤村は一九一五年(大正四)一月に『平和の巴里』、同  
年一二月に『戦争と巴里』を刊行している。

### ●心機一転、帰国して人生をやり直す決意を固める

社会的糾弾を免れ得ない近親相姦という罪科を背負ってパリに隠遁<sup>いんとん</sup>した  
藤村だったが、その秘密が三年余にわたって完璧に隠蔽<sup>いんべい</sup>されたことは、そ  
の後の藤村の心境に大きな変化<sup>もたら</sup>を齎<sup>もたら</sup>すことになった。つまり、発覚するこ  
とに対する怯<sup>おび</sup>えが減衰し、こま子に対する贖罪<sup>しよくざい</sup>の念が希薄化した結果、藤  
村は遂に悪夢から解放され、明るい未来を目指すようになる。

それは現実的には海外逃避の解消、つまり帰国することと、出来れば新

しい妻を娶<sup>めと</sup>って幸せな家庭を築きたいという「夢」である。そのためには、こま子を是非とも結婚させなければと藤村は考えた。

日本脱出を決意した時と同様、一度、決心すると藤村の行動は素早く、一九一六(大正五)年三月にシモネエの下宿を引き払ってソルボンヌ礼拝堂の前にある「セレクト・ホテル」に引っ越している。滞在費節約のためパンテオン脇にある安価なギリシャ料理屋の常連となるが、そのお供をしたのがこのホテルに同宿していた作家修行中の水上瀧太郎である。

藤村がパリを立つ一週間ほど前のことである。水上が仲間たちと自室で骨牌<sup>カルタ</sup>をして遊んでいた時、藤村が途中で入って来るが、その顔を見て一同が驚きの声を上げる。パリに滞在している間、藤村は鼻の下に極めて大きく、しかも威厳のある口髭<sup>くちひげ</sup>を蓄えていたが、それがすっかり無くなって、その剃り跡が青々としていたのである。

間髪を入れず、水上が「何かそれには意味が有るんですか」と尋ねるが、藤村は返事に窮したのか苦笑いするだけだった。この件は多少、脚色されて『新生』に登場しており、「『岸本さん、髭が無くなりましたね。何かそれには意味が有るんですか』同じ旅館に泊っている留学生が小旅行から戻って来て、それを岸本に尋ねた。この人は慶応出で……」<sup>(31)</sup>「『昔、岸本さんは坊主にお成んなすったとか——』「『何かそれと同じような意味でもあるんですかね』さすがに、この人の言うことは鋭かった<sup>(31)</sup>」と書かれている。この留学生は水上のことである。

帰国した後、水上は「巴里に居る間、私は先生がどういふ心持で日本を後にされたのかわらなかつた。後日、『新生』を読む迄、あの大作の中に揃かされた苦悶をいだいて居られようとは思はなかつた。たゞ巴里に於ける先生の姿は如何にも寂しかつた。陰鬱だつた<sup>(32)</sup>」としたうえで、口髭を剃り落としたことについて「私には不満がある。頭を剃るとか髭を落すとかいふ、しぐさにはあらはれた事をしないで、何故先生一流の肚でこたへて忍んでしまはなかつたのだらう<sup>(33)</sup>」とそれを意気地の無さと捉え、苦言を呈している。

多分、帰国にあたって心機一転という気持ちだったのだろうが、藤村は一九一六(大正五)年四月二九日午後五時、パリ・サンラザール停車場から列車でイギリスに向けて出発する。その際、三年間にわたるパリでの異邦人生活を振り返って、まるで恋人に対する「惜別の詩」のような一文を残している。

「<sup>パリ</sup>巴里よ。私は<sup>ヨーロッパ</sup>欧羅巴を去ろうとするに<sup>(34)</sup>のぞみ、<sup>ひとこと</sup>一語の別れの言葉もなくこのまま遠く離れて行くことは出来ない」

「近代の<sup>ローマ</sup>羅馬とも言うべき都よ。『芸術の都、文明の泉源、風俗の中心、流行の中心』としてかつて<sup>フランス</sup>仏蘭西の作家が誇った都よ。『システムチックで、冷静で、意思によったものである』とまで同じ作家をしてお前の文明を誇らしめた都よ。建設と破壊とを同時に有する都よ。詩と散文とを同時に有する都よ。羅馬旧教と科学とを同時に有する都よ。帝王の意志と革命家の理想とを同時に有する都よ。私はお前からかすかすの醜いもの、濁ったもの、<sup>よど</sup>澱んだもの、<sup>いと</sup>厭わしいものを感知したけれども、また一口に言って見ようならお前の印象は冷かったけれども、それにもかかわらず私はお前を忘れることが出来ない。遠い昔のダンテの夢が近代のたましいに生きながら得ることを私にささやいてくれたのもお前だ<sup>(34)</sup>」

「過ぐる三年の間、私の寂しい旅情を慰めてくれたお前のセエヌの水。私は長くお前のセエヌをも忘れることはあるまい。さらば<sup>(34)</sup>」。

永井荷風の『ふらんす物語』を彷彿させる詩情豊かな名文である。そして、正宗得三郎と共にロンドンに渡った藤村は、五月九日に日本郵船「熱田丸」でヨーロッパを後にする。第一次大戦の影響もあって、航路はアフリカの喜望峯回りを余儀なくされたが、約二カ月後の七月四日、神戸港に無事、帰着している。

故国の土を踏んだ藤村は東京に戻る前、京都で途中下車して、パリで肝胆相照らす仲となった京都帝大の河上肇と再会し、南禅寺近くの有名料亭「瓢亭」に招かれる。そして、素晴らしい日本庭園を目の当たりにして思わず息を飲むが、これはパリの公園を讚美して<sup>はばか</sup>憚らなかった藤村に対する

河上の当て付けだった可能性も否定できない。

そして、東海道線で東上した藤村は七月八日、東京駅まで行かず、手前の品川駅で下車して、人目を避けるようにひっそりと留守宅に戻っている。しかし、翌日には新聞記者が取材に訪れており、一〇日付けの読売新聞は「三年間昼寝に行ってきたようなもので、大した意味はない」という藤村の素っ気ない帰国談話を掲載している。

### ●こま子との関係復活と『新生』発表をめぐる「大いなる鈍感」

日本の我が家に戻った藤村は、次兄の広助は言うに及ばず、藤村の子供を産んだこま子も笑顔で迎えてくれたため、三年余にわたって自分を苦しめ続けた心配が杞憂きゆうに終わったことを知る。そして、小説家としての仕事の遅れを取り戻そうとするかのように、さっそく近所に仕事場を借りて執筆活動を再開する。

これが後に過ちを再発させることになるのだが、日本脱出前と同様、藤村はこま子を仕事場に呼び寄せ、雑務や執筆の手伝いをさせる。しかし、どれほど自身の犯した罪業を悔やみ、懊惱おうのうし、贖罪しよくざいの念に捉われたといっても、藤村にとって彼女は禁断の果実むさぼを貪った相手である。しかも、帰国してみると、彼女は三年前と違って、すっかり成熟した女になっていた。いかなる倫理よりも本能が勝るのは当然で、長い間、性的謹慎生活を余儀なくされていた藤村が、その鬱屈うつくつを晴らすかのように「肉欲」という修羅場に足を踏み入れるのは時間の問題だった。

『新生』によると、ある日の朝早く、岸本(藤村)が台所へ顔を洗いにいくと、節子(こま子)一人が立ち働いていた。そして、「彼は殆んど衝動的に節子の側へ寄って、物も言わずに小さな接吻せつぶんを与えてしまった(35)」のである。それをきっかけに、二人は再び人倫に悖る迷路に迷い込むことになるが、今回の場合、藤村はこま子の中に「女」を感じ、それを愛めでる気持ちが生じていた。

それは『新生』の中で、岸本(藤村)が節子(こま子)に投げ掛けた次のよ

うな言葉からも察せられる。「叔父と姪とは到底結婚の出来ないものかねえ」「いっそ お前を貰っちゃもう訳には行かないものかなあ。どうせ 俺は誰かを貰わなけりゃ成らない」「節ちゃん、お前は叔父さんに一生を託する気はないかい——結婚こそ出来ないにしても」。(36) この言葉をそのまま受け取るわけにはいかないが、その後、伝統的な社会倫理に挑むかのように新聞紙上で二人の関係を赤裸々に公表した事実を鑑みると、叔父と姪という近親関係を超越した男女愛を考えていたとしても不思議ではない。

一九一八(大正七)年四月五日、広助の妻、つまりこま子の母、あさが長ながわづら患いの末、病没する。こま子との件を打ち明けて謝罪する勇気がなかったのか、藤村は帰国後、一年半以上が経過したというのに、彼女に真実を語ることはなかった。その頭の上から義姉が亡くなったことで気が楽になったのか、藤村はその直後から本格的に『新生』の執筆に取り掛かるのである。

そして同年五月一日、こま子との関係を六年前さかのぼに遡って詳細に綴った告白小説『新生』(前篇)が東京朝日新聞に掲載され始める。この「前篇」は同日から一〇月五日にかけて計一三五回連載されるが、登場人物の名前こそ実名でないものの、事実関係は極めて正確で、その文学的評価が論じられた際、「これは小説ではなく、日記に過ぎない」といった批判が出る程だった。

この作品はルソーを意識した我が国では類例のない衝撃的な告白小説で、藤村にとっては自身の恥を白日の下に晒すというリスクがあったものの、これまでにない野心的な新機軸によって文壇に一石を投じたいという思いがあったに違いない。しかし、それは「小説家藤村」の論理であって、その作品に登場させられ、世間に知られたいと思ふべき秘め事まで暴露されたこま子の立場は一体、どうなるのだろうか。

その意味において、この作品を発表するに際して、藤村が彼女の了解を得ていたのかが重要なポイントになる。その間の経緯いきさつについて、『新生』では「岸本はその初冬らしい親しみを増した障子の側で、懺悔を

書こうと思うという話を節子に聞かせて、彼女の承諾を求めようとした。その日まで隠しに隠して来た二人の秘密を曝け出してしまおうということは、岸本の方で思ったほど節子を驚かしもしなかった」とある。

そして、「のみならず、彼女は例の率直な調子で、岸本の思い立ちに同意をあらわした。『黙って置きさえすれば、もう知れずに済むことなんですけれど——』と節子は言った。『わたしにお嬢に来てくれなんて煩いことを言う人も無くなって、却って好いかも知れません』岸本は節子の顔を眺めたまま、しばらく言葉も無かった」と続く。

ここで注目すべき点は後段の節子(こま子)の言葉で、岸本は「同意した」と解釈しているものの、彼女の「黙って置きさえすれば、もう知れずに済むことなんですけれど」、さらに「わたしにお嬢に来てくれなんて煩いことを言う人も無くなって、却って好いかも知れません」という自嘲に満ちた言葉は、大作家である叔父、藤村に対する姪の精一杯の異議申し立てではなかったか。

そうだとすれば、藤村はあまりにも無頓着で、繊細な乙女心を感じできなかったことになる。多くの文芸批評家が指摘する藤村の「大いなる鈍感」である。その一方で、こま子の気持ちは十分、分かっていたが、それを敢えて無視する形で「事前承諾」と書くことによって、自己を正当化しようとした可能性も否定できない。

### ●「自殺するかもしれない」と危惧する田山花袋

このように、こま子の承諾には疑問が残ると言わざるを得ないが、驚愕すべきことは、その作品発表を次兄の広助に内緒にしたままだったという点である。彼はこま子に密かに出産させ、その子を養子に出し、しかもそのことを妻に隠し通すなど、藤村の社会的名誉のために獅子奮迅の隠蔽工作を行ってきた恩人だったにもかかわらず、何の断りもなく「事実」を新聞連載という形で世間に公表してしまったのである。

広助がこの問題解決に尽力して来たのは、藤村や島崎家のためだけでは

なく、叔父との間に子を成した自分の娘、こま子が世間から蔑まされることを恐れ、その身を護るためでもあった。藤村がそれら全てを告白小説と銘打って赤裸々に公表することは、広助にとって到底、容認できず、それを恩を仇で返す裏切りと受け取り、激しく憤ったのも宜くなるかなである。そして、広助はこの件で藤村に「義絶」を言い渡すことになる。

一方、朝日新聞によって連日、藤村と姪との許されざる近親相姦の事実が明らかにされて行くのを、文壇仲間たちは固唾を呑んで見守ることになる。それは文学批評という観点からではなく、事実の推移に対する関心が中心で、藤村の無二の親友である田山花袋は、節子(こま子)が岸本(藤村)に懐胎の事実を告げる第十三章が掲載された日、我を失って狼狽える。そして、弟子の白石実三に「困ったことになった」「藤村は自殺するかもしれない」「かといって、『大丈夫か』と励ましに行くのも変だし…」と眩きながら右往左往するのだった。

藤村の身を案じて激しく動揺する師匠、花袋の姿を目の当たりにして、当の白石は「冷たい藤村とは違って、人間的に優しい花袋の姿に感銘を受けた」と当時を回想している。実際、藤村という小説家には、作品のためなら何事も犠牲にして憚らないという冷徹さがあり、人間として恥ずべき自身の秘密ですら公にしても厭わない堅固な信念の持ち主だった。それ故、花袋が心配した「自殺」の可能性など、藤村の頭にはまったく無かったわけで、その点に関して花袋の藤村理解は浅かったと言わざるを得ない。

これについて、平野謙は「なによりも『蒲団』の作者と『新生』の作者との距たりを、ほとんど好人物とよんでもいい赧ら顔の田山花袋と『老獺』と後輩の作家から評されねばならなかったような島崎藤村との気質的相異を、このエピソードは如実にあらわしている」と述べているが、二人の性格はそれほど対照的だったのである。<sup>(38)</sup>

いずれにせよ、『新生』の内容が人間情理に叛く背徳的な近親相姦であったが故に、この小説は社会に一大センセーションを巻き起こすことになる。「前篇」の連載が終了した段階で、東京朝日新聞の編集局では「後篇」



を出すかどうかで紛糾する。世間からの非難が予想以上に強かったためだが、話題になればなるほど読者も増えるといった商業主義的な動機も絡んで、結局、ゴーサインが出された。そして、「後篇」は翌一九一九(大正八)年四月二七日から一〇月二三日まで計一四一回連載されたのである。

この「後篇」はフランスから帰国した岸本(藤村)が、節子(こま子)と再び不倫の関係に陥るところから始まっており、「前篇」と違ってその端緒や経緯などが二人の会話などを通して事細かく書かれている。また、その間の両者の挙動や心模様の変化なども繊細なタッチで描かれており、そこには愛に対する宗教的要素すら散見される。

結局、節子は人目を避けるようにして台湾の別の叔父の許に引き取られるが、その出発に際して、彼女が岸本宅の庭に植えた秋海棠しゅうかいどうの根を岸本が深く埋め直しているところで『新生』は終わっている。この秋海棠は、藤村がかつて訪れたパール・ラシェーズ墓地のアベラールとエロイーズの墓「愛の比翼塚」の傍らに咲いていた花で、藤村は様々な偏見や困難を乗り越えて愛を貫いたこの二人の人生に深く共鳴しており、そのことをこま子に熱く語ったことがある。その花を物語のエンディングに登場させ、そこに自分たちの愛の姿を投影することによって、社会的に許されざる背徳と不倫という根から真実の愛が芽吹くことを暗喩したのである。

しかし、平野謙はそこに虚飾を見て取っている。「最後の最後まで、捨吉(岸本：筆者挿入)は母ならびに人としての節子を黙殺してかかった」「前後七年間心胆をくだいた愛の対象は土葬されたも同然となった！」<sup>(39)</sup>として、そのエンディングで暗示された新たな愛や未来への展望などは在り得なかったと主張する。実際、藤村がその後、こま子に対して取った冷淡な態度を斟酌すると、平野の見解に首肯せざるを得ないのである。

その意味では、こま子にとって藤村は非情の存在でもあったわけで、そのことは『新生』における藤村と、こま子の姉の間の次の遣り取りからも窺い知ることが出来る。新聞連載が始まると、当然、世間の好奇の目が節子に注がれるわけで、見るに見かねた姉が「ほんとにあんなことをお書き

になって、節ちゃんをどうして下さいます」と岸本に詰め寄ると、岸本は「でも節ちゃんは承知なんだ」「誰が迷惑するって言ったって、一番迷惑するのは俺じゃないか」と<sup>(40)</sup> 無然として言い返しているのである。

### ●荒廃の中からの回生か、それとも自己暴露による世間への復讐か

「当時私は心に激することがあってああいう作を書いたものの、私達の時代に濃いデカダンスをめがけて鶴<sup>つるはし</sup>嘴を打ち込んで見るつもりであった。荒れすさんだ自分等の心を掘り起して見たら、生きながらの地獄から、そのまま、あんな世界に生き返る日も来たと見て見たいつもりであった。」

これは『新生』の作意について、藤村が「文藝春秋」（一九二七年一月号）に寄せた一文である。これについて、川端俊英は「かつて『破戒』の丑松にとって、父からすれば狂気の沙汰とも思えるような素性の告白が、自己の精神的救出・新生のために避けがたい道だったことと重ね合わせられる<sup>(41)</sup>」としたうえで、「ここでは〈つもり〉が二度くり返されているが、一つは時代思潮として色濃かったデカダンス目掛けて〈鶴嘴を打ち込〉むというスケールの大きい試みであり、もう一つはそのことを通して荒廃の中から回生せんとする自己革新の試みである。しかし、こうした〈つもり〉も結局は果たし得ずに終わらざるを得なかった<sup>(41)</sup>」と当初の目論見がいずれも失敗に終わったと指摘している。

実際、「地獄から生き返る」ことが出来たのは藤村だけで、置き去りにされたこま子のその後の人生は、まさに地獄そのものであった。それ故、瀬沼茂樹も藤村の『新生』発表を「新しく生きるための根強い自己愛に出た行為<sup>(42)</sup>」、さらに佐々木冬流も「一切をなげうち、自分をぎりぎりの線までおいこんで、そこから回生の道を探そうと考えた<sup>(43)</sup>」と分析するのである。

藤村は二十代の初めにルソーの『告白録』（『懺悔録』）を英訳で読み、人間本位の観点から伝統的社会因襲からの解放の必要性を学んでいる。そこから発したヒューマンな自由主義を敷衍すれば、藤村が犯した姪との行為は儒教的道德精神から批判されて然るべきかもしれないが、社会規範を超

越した人間本位の主体的な性愛という観点からは是認されても良いのではないかということになる。

つまり、このような点において、『新生』は私生活の暴露に止まらず、旧態依然とした価値観に対する自爆覚悟の反抗という要素を内包しているわけで、これについて亀井勝一郎は「『背徳』を以て世の抽象的道德に抗しようといふ心が、『新生』を描く動機にひそんでゐた<sup>(44)</sup>」とし、その作意の底に「自己曝露による世間への復讐<sup>(44)</sup>」があったと洞察する。もし、そうだとすれば、藤村は自己暴露や恥の暴露、性の暴露、そして姪の名誉と人生を台無しにしてまで、勇猛果敢に「現実」を支配する社会的価値観や道徳観に挑んだことになる。

このように、『新生』の文学的評価のキーポイントが作意にあることは万人の認めるところであるが、それについて、藤村の私生活まで丹念に調べ上げて導き出した「平野謙説」が最も有力視されている。彼の言葉を借りると、「藤村が『新生』を書いた最大のモチーフは、姪との宿命的な関係を明るみへ持ち出すことによって、絶ちがたいそのむすびつきを一挙に絶ちきるところにあった」「その自由要望の声はほかならぬ恋愛からの自由を意味している<sup>(45)</sup>」ということになるが、平野はそれだけでは不十分と考える。

そこで、もう一つの要因として指摘するのが、「生活のための金銭の問題だった」というのである。藤村はパリ滞在中、留守宅を預かってもらった次兄、広助に子供たちの生活費など多額の仕送りをし、その間、こま子の分娩費や産後の乳腫の手術費なども支払っている。ところが帰国してみると、広助に任せていた留守宅の財政は、こま子の着物まで質に入れるほど惨憺たる状況で、重患に陥っていた嫂<sup>あによめ</sup>の治療費や入院費用まで負担させられる羽目になる。そのような実生活における経済的困窮に直面して、兎にも角にも、早急に原稿を書いて生活費を稼ぐ必要に駆られたと分析するのである。

そのような喫緊の現実的事情があったわけで、平野は藤村がどれほど自

己暴露をしたとしても、「その決意はどのような意味でも『自殺』を聯想さすものではなかった」「それはいかにかして生きぬきたい人間の執拗な動物力につらぬかれた決意にほかならなかった」と考える。<sup>(38)</sup>

まことに緻密な分析と言わざるを得ないが、この平野説に対して、十川信介は「自分の罪過が、ともかくもこの一家を三年間支えて来た、といった表現は彼(藤村：筆者挿入)の精一杯の反発であり、平野がこの作の現実的作因を『金銭からの自由』に求めたのも、無理からぬ面がある」と同調する。<sup>(46)</sup> また、中山和子も「作家の私生活にまで鋭く切り込む平野謙の、いわゆる『探偵的(?)』方法が先駆的に解きあかした」<sup>(47)</sup>「文学作品をよむことは、やがてその作者の生き方を学ぶことだという、古風といえはいえる平野謙に一貫した態度は、作者の実生活の探索へむかう傾向をおのずからはらんでいる」と評価している。<sup>(47)</sup>

藤村の実生活を丹念に調べたうえで、『新生』の発表に至った経緯を解き明かした平野の慧眼<sup>けいがん</sup>は特筆すべきものがあるが、その私生活まで暴く平野の徹底した手法に対して、川端康成は「作家がこんな風にやられてはたまらぬ」と藤村に同情的だったという。

### ●藤村を「老獺な偽善者」とする芥川龍之介の痛烈な批判

『新生』の文学的評価については、近松秋江や徳田秋声、岡本かの子など多くの作家が否定的な見解を表明している。正宗白鳥も「罪を背負つたにしても、『復活』のネフリユードフの如く、相手の女性のために自分の身を棄てるやうな熱情は、藤村の心に湧かなかつた」「どうかして生きようとしてさまざまな魂膽を凝らすのが、浅間しいやうでもある」<sup>(48)</sup>と批判的な評価を下している。

その作因を「恋愛からの自由と金銭からの自由」と指摘した平野謙は、そもそも最初から芸術的(文学的)作因が存在していなかったが故に、その作品は評価に値しないと一刀両断している。また、文芸評論家の花田清輝に至っては、藤村を「狡智にたけた大犯罪者」「生涯にわたって誠実の仮

面を巧み<sup>かぶ</sup>被り続けた」などと舌鋒鋭く切り捨てている。これについて、亀井勝一郎は「確かに、それは事実」としながらも、そのような過激な批判を前にすると、それらの糾弾者が「私立探偵所の事務員」のように見えてしまうから不思議だと述べている。

確かに、『新生』は不条理に満ちた作品ではあるが、その一方でそこには人間の本性を鋭く抉る文学的<sup>えぐ</sup>重量感があり、それと比較すると激情に駆られた非難には何処か、浅はかな印象が拭えないというのである。だからといって、亀井はけっして『新生』を評価しているわけではなく、この作品を「一級の告白文学」と激賞する人々に対しては「甘い感傷家にみえてくる」と一蹴<sup>(49)</sup>している。

そして文壇史上、忘れてならないのが芥川龍之介の激烈な藤村批判である。それは自伝の『或阿呆の一生』(一九二七〈昭和二〉年六月)に書かれたもので、「ルッソオの『懺悔録』さえ英雄的な<sup>み</sup>謙に<sup>み</sup>充ち満ちていた」<sup>(50)</sup>「殊に『新生』に至っては、——彼は『新生』の主人公ほど老獪な<sup>ろうかい</sup>偽善者に出会ったことはなかった」とルソーと藤村を一括りにして糾弾している。

姪との恥ずべき背徳の関係を「告白小説」と称して発表する行為、そのものに対する嫌悪感を「偽善者」という言葉で象徴的に表現したのである。そこには姪の名誉を犠牲にして何とも思わない身勝手な自己中心主義、さらに如何なることがあっても「生き抜く」という、藤村の驚くべき「生」に対する執念を目の当たりにして、芥川はそこに人間としての卑しさと腐臭を感じたのである。実際、芥川は文人仲間たちに「藤村ほど嫌な奴はいない」と言い放っている。

この芥川の「老獪な<sup>ろうかい</sup>偽善者」という言葉は文壇で大きく取り上げられ、藤村批評の一種のメルクマールとなったが、これについて正宗白鳥は「偽善者であるとか、狡猾であるとか、氣取りやであるとか、さまざまな悪評が藤村の頭上に下されてゐるが、私は敢へてそれ等の悪評を否定しようとは思つてゐない」と同調<sup>(48)</sup>している。

また、亀井勝一郎も「作家としての妄執から離れ去らうとした人の眼に、

その(藤村の：筆者挿入)存在がすでに虚偽とみえてゐたことは明らかだ。虚構は罪悪である。作家のいかなる懺悔も信じるに足らないと。彼(芥川：筆者挿入)は藤村の裡なる悪魔が、どうかして生きたいといふ求道の亡者に(51)「『老獺な偽善者』といふ言葉は、まさにそのとほりなので、『新生』には辯解の餘地はあるまい」と芥川を全面的に擁護している。

さらに、「(藤村の：筆者挿入)鈍重で持続的な自己執着心は、芥川のごとき犀利で繊細な都會人の知性には、或はその植物性の肉體には、たまらぬ臭味として映つたかもしれない」と両者の稟性(53)の相違を指摘する。その一方で、「ふしぎなことだが、さう言ひきつた芥川の姿が、藤村に比べて『軽く』みえてくる」「そしてこんな反問が浮ぶ。芥川自身は、老獺ならざる偽善者ではなかつたか(52)とも述べている。つまり、単純明解な都会派の芥川に対して、藤村は何処(54)得体の知れない田舎者(54)のような存在だが、その老獺さの中に元来、作家が追求すべき不条理な人間性があるのも事実で、それを感情的に捨象してしまうのは如何なものかという懷疑である。

一方、平野謙は芥川と藤村の生い立ちの類似性に着目し、「芥川龍之介もまた病み弱まってゆく血族にとりかこまれ、たえずその係累になやまされていた人である。そのような芥川龍之介は狂人の子という同じ暗い星のもとに生れた島崎藤村にひそかな注目をおこたらず、自己の宿命に打ちひしがれるかと思えば、またねばりづよく生きぬいてゆく藤村をみずからの(54)孱弱な体質と対置して、そこにぬきがたい憎悪を感じていたに相異なる」と考え、芥川にとって藤村は「不俱戴天の仇」だったと位置づけている。

文壇の寵児だった芥川のこの批判に対し、藤村は沈黙を守り通した。一方、芥川はこの一文を(54)認めた翌月、「将来に対する唯ぼんやりした不安」という理由で服毒自殺をしている。すると、まるでそれを待っていたかのように、藤村は「芥川龍之介君のこと」(一九二七年「文藝春秋」一一月号)という一文で反論に打って出る。

「芥川君は懺悔とか告白とかに重きを置いてあの『新生』を讀むんだや

うであるが、私としては懺悔といふことにそれほど重きを置いてあの作を書いたのではない」「もと〜私は自分を偽るほどの余裕があつてあの『新生』を書いたものでもない。当時私は心に激することがあつてあゝいふ作を書いたものの、私達の時代に濃いデカダンスをめぐらして鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた。荒れずさんだ自分等の心を掘り起して見たら生きながらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に生き返る日も來たと言つて見たいつもりであつた」。

芥川が存命の時には黙して語らず、死後にこのような“釈明文”を發表したことに對して、文壇では批判の声が渦巻くことになる。つまり、すでに亡くなっている芥川には再反論する余地がまったく無いわけで、これこそ芥川が指摘した「老獪な偽善者」の証左というのである。

これについて、亀井勝一郎も「攻撃されたら直ちに反駁し、論戦すべき」「相手の死後にねちねちと且つものものしく答へるといつた性格が『思はせ振り』にとられたのかもしれない」と藤村を批判。<sup>(55)</sup>そして、あっさりとして自死した芥川と對置する形で、藤村の「どうかして生きたい」という粘り強さに着目して、「(そこに：筆者挿入)或る體臭を感じる。私は全作品を通して、これらの言葉に接すると何か胸がむかづいてくる」「汗の汗くさいところを、しかも勿體ぶつてみせつけられるやうである」<sup>(56)</sup>と芥川と同様の嫌悪感を顕わにしている。

### ●「処女崇拜の詩人が処女蹂躪の野獣と化した」

それでは、亀井は藤村とこま子の関係を一体、どのように見ていたのだろうか。それについて、彼は藤村の詩の魔力を俎上<sup>そじょう</sup>にあげ、「(節子は：筆者挿入)彼の詩集によつて煽動され、処女崇拜の詩人は処女蹂躪の野獣と化した」<sup>(57)</sup>と考える。また、この作品の主題になっている「贖罪」<sup>しよくざい</sup>については、「罪の意識ほど微妙なものはない。エゴイズムの微妙さそのものだと云つていゝほど、不可分にむすびついてゐる。『新生』ほどこれをむざんに露呈した作品はない」<sup>(57)</sup>と平野と同様、懷疑心を隠さない。



つまり、亀井は「罪悪感<sup>(58)</sup>は純粹に自分の心奥からのものでなければならぬ」「人間は神の眼よりも人の眼を恐れるもの」という信念の持ち主で、その観点から「岸本には告白の對象たる神はない。神を離れた人だ。さういふ人間の、弱さを露呈したといふ點でむざんな凡夫ぶりがみられる」といふ帰結に至る。そして、その見解こそが芥川の「老獪な偽善者」に合い通じるのである。

さらに付言すると、亀井は藤村が陥った苦境に遭遇すれば「芥川は言うに及ばず、太宰治も人間失格と自覚して自殺したであろう」と述べ、自死などまったく念頭になかった藤村の生き様を「恐るべき妄執」と形容している。

### ●エゴイズムを超越した鈍感性の持ち主と朦朧たる操り人形<sup>もうろう</sup>

この作品において、藤村の「贖罪<sup>しよくざい</sup>」の對象がこま子(節子)だったことは言うまでもない。ところが、正宗白鳥が「藤村は、現實の一女性を自己の犠牲にしたばかりでなく、創作中の一女性をも、自分の都合のいゝやうに取扱つてゐる<sup>(59)</sup>」と述べているように、彼女に対する懺悔<sup>ざんげ</sup>の気持ちは想像以上に稀薄だったと考える。

これについて、平野は「男性のエゴイズムを超越した奇怪至極な鈍感性」という言葉で岸本(藤村)を槍玉に挙げると同時に、作品の中の節子(こま子)が「朦朧たる傀儡性<sup>もうろう かいらいせい</sup>」を纏った操り人形として描かれていると批判する。

こま子が藤村との不倫関係、さらに『新生』の発表によって人生を台無しにされ、筆舌に尽くし難い「その後」を送ったことは事実である。彼女は世間から隔離されるかのように台湾に送られ、内地に戻ってからは雑用婦として働き、その間、左翼学生と結婚して女兒をもうけている。しかし、その男は地下に潜って消息を絶ってしまったため、こま子は託児所の保母や石鹼の行商、消費組合の事務員といった職を転々としながら糊口を凌ぐ<sup>しの</sup>が、一九三七(昭和一二)年の春、ついに極度の過労と栄養失調<sup>ただ</sup>が祟って倒



れ、行路病者として養育院に収容されてしまう。

『新生』のもう一人の主人公である「節子」が、身元引受人も無い行き倒れになったとあって、新聞記者たちが談話を求めて藤村の元に殺到する。しかし、彼らの取材に対して藤村は迷惑顔を隠さず、「あの人には姉がいるから、その姉に相談すべき」「私が何かするという事は、まったく考えていない」と他人事のように冷たく言い放ったのである。

その出来事が契機になったのか、こま子は長い間の沈黙を破って、「婦人公論」（同年五月、六月号）に手記を発表する。その内容は「『新生』に書かれたことの大半は事実だが、実は書かれていない事実も非常に多かった」というもので、「告白小説」と銘打ったこの作品は、実は藤村にとって都合の悪いところが巧みに伏せられていたと指摘している。

## ●おわりに

藤村は自身が創刊した婦人雑誌の編集を手伝っていた美貌の女性、加藤静子を見初め、一九二八（昭和三）年一月に結婚している。彼女は藤村より二周り年下で、津田英学塾（現・津田塾大）を中退した才女だった。

そして、一九三五（昭和一〇）年一月に日本ペン倶楽部初代会長に就任した藤村は、その翌年、妻、静子を伴ってアルゼンチンで開催されたペンクラブ国際大会に出席。その後、アメリカを経由して同年一月、一九年ぶりにパリを訪問している。若い妻を案内して回るが、街の様相はすっかり変貌しており、いつしかそれが失望となって藤村に帰国を急がせる。

そして、日本向けの船が出航するマルセイユに到着するが、時間待ちの間に訪れたロンシャン美術館で、藤村は魂を揺さぶられるような芸術作品と邂逅する。シャバンヌの壁画「東方の門」である。そこには、人種や民族を問わぬ人々が一緒に働いている様子が生き生きと表現されており、常に東洋人として違和感のある目で見られ続けて来たこの旅の終焉において、世界融和を象徴するこの壁画に出合って藤村はいたく感動するのだった。

帰国後、藤村は神奈川県大磯の別宅に籠こもって小説『東方の門』の執筆に

取り掛かる。ところが、一九四三(昭和一八)年八月二一日の朝、第三章を執筆していた時に突然、意識朦朧となる。そして意識喪失の直前、傍らにいた妻に、庭から吹き込んで来た風を「涼しい風だね」と語ったとされるが、翌二二日午前零時過ぎ、波乱に満ちた生涯を閉じるのである。享年七十一、病名は脳溢血だった。

浪漫詩人であり、『破戒』や『春』『新生』『夜明け前』といった名作を残した大家だったにもかかわらず、藤村ほどその人物に対する評価が大きく分かれる作家は珍しい。「文豪」あるいは「巨匠」と呼ばれた森鷗外や夏目漱石とは明らかに存在感が異なり、その小説世界も過度に内省的で、際立った自我の存在、そして自己の内なるものに対する鋭利な凝視が大きな特徴となっている。

そのような藤村文学を、亀井勝一郎は「何か人をいらだたせるやうな沈黙がいつも背後にある。この沈黙と告白衝動との対立が彼の作品の内面の劇を形成するのだが、それが勿體ぶつてゐるやうな印象を與へる」「むしろその反面に精密な知的計量と凝視の持続性があるわけだが、およそ自由奔放とか氣軽さとか即興性からは縁遠い存在」と分析する。それ故、漱石作品のように読者から圧倒的な親近感や讃辞を受けることがなかったのである。

実際、藤村の場合、自己の内面に渦巻く情欲や苦悩、憎悪、怨恨、嫉妬といった「暗部」を凝視し、そこから人間の赤裸々な真実を抉り出すという極めて濃厚な内容の作品が多かった。そして、それらが大なり小なり「島崎家」に由来する淫蕩と頹廢の血、さらにそれらと相反する倫理性や潔癖性と相俟って、宿命的に「藤村文学」を深遠なものにしているのである。

#### 引用・参考文献

- (1) 『島崎藤村論』「フランスの旅より」、亀井勝一郎著、新潮社、1953、157頁。
- (2) 『新生(上巻)』「第十三章」、島崎藤村著、新潮文庫、1955、43頁。
- (3) 『新生(上巻)』「第二十九章」、島崎藤村著、新潮文庫、1955、77頁。

- (4) 『新生(上巻)』「第二十九章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 76頁。
- (5) 『新生(上巻)』「第二十八章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 76頁。
- (6) 『新生(上巻)』「第三十三章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 85頁。
- (7) 『藤村のパリ』, 河盛好蔵著, 新潮社, 1997, 9～10頁。
- (8) 『新生(上巻)』「第五十四章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 124頁。
- (9) 『新生(上巻)』「第八十七章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 185～186頁。
- (10) 『島崎藤村論』「新生について」, 亀井勝一郎著, 新潮社, 1953, 190～191頁。
- (11) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」 「藤村の思ひ出」, 武者小路実篤著, 河出書房, 1954, 108頁。
- (12) 『新生(上巻)』「第八十六章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 185頁。
- (13) 『新生(上巻)』「第六十八章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 150頁。
- (14) 『新生(上巻)』「第六十九章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 153頁。
- (15) 『藤村のパリ』, 河盛好蔵著, 新潮社, 1997, 107頁。
- (16) 同, 154頁。
- (17) 『藤村文明論集』「フランスだより 音楽会の夜, その他」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 49頁。
- (18) 『藤村文明論集』「フランスだより 春を待ちつつ」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 63頁。
- (19) 『島崎藤村』「パリへの旅立ち」, 十川信介著, ミネルヴァ書房, 2012, 162頁。
- (20) 『藤村文明論集』「フランスだより 音楽会の夜, その他」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 46頁。
- (21) 『藤村文明論集』「フランスだより 街上」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 82頁。
- (22) 『新生(下巻)』「第二百二十四章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 256頁。
- (23) 『藤村文明論集』「フランスだより 巴里の旅窓にて」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 23頁。
- (24) 同, 26頁。
- (25) 『藤村文明論集』「フランスだより 街上」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 70～71頁。
- (26) 『藤村文明論集』「フランスだより エトランゼエ」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 19～20頁。
- (27) 『藤村文明論集』「フランスだより 巴里の旅窓にて」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 24～25頁。
- (28) 『藤村文明論集』「フランスだより 春を待ちつつ」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 63～64頁。

- (29) 同, 65頁。
- (30) 『藤村文明論集』「フランスだより 街上」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 78~79頁。
- (31) 『新生(下巻)』「第六章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 15頁。
- (32) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」「思ひ出」, 水上瀧太郎著, 河出書房, 1954, 117頁。
- (33) 同, 118頁。
- (34) 『藤村文明論集』「フランスだより 巴里を離れるにあたって」, 島崎藤村著・十川信介編, 岩波文庫, 1988, 103~104頁。
- (35) 『新生(下巻)』「第三十一章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 64頁。
- (36) 『新生(下巻)』「第四十二章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 85頁。
- (37) 『新生(下巻)』「第百二章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 209頁。
- (38) 『島崎藤村』「新生」, 平野謙著, 岩波書店, 2001, 67頁。
- (39) 同, 127~128頁。
- (40) 『新生(下巻)』「第百十五章」, 島崎藤村著, 新潮文庫, 1955, 237頁。
- (41) 『島崎藤村の人間観』「『新生』から『処女地』へ—『新生』の反響と執筆意図」, 川端俊英著, 新日本出版社, 2006, 145頁。
- (42) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」「島崎藤村の生涯」, 瀬沼茂樹著, 河出書房, 1954, 36頁。
- (43) 『島崎藤村』「バリの前後」, 佐々木冬流著, 清水書院, 1966, 90頁。
- (44) 『島崎藤村論』「新生について」, 亀井勝一郎著, 新潮社, 1953, 209頁。
- (45) 『島崎藤村』「新生」, 平野謙著, 岩波書店, 2001, 111頁。
- (46) 『島崎藤村』「『桜の実の熟する時』から『新生』へ」, 十川信介著, ミネルヴァ書房, 2012, 184頁。
- (47) 『文学』(第五十卷 第九号)「平野謙—『島崎藤村—「新生」覚書』(上)」, 中山和子著, 岩波書店, 1982, 1頁。
- (48) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」「島崎藤村論」, 正宗白鳥著, 河出書房, 1954, 21頁。
- (49) 『島崎藤村論』「新生について」, 亀井勝一郎著, 新潮社, 1953, 214頁。
- (50) 『歯車 他二篇』「或阿保の一生」「四十六歳<sup>うろそ</sup>」, 芥川龍之介著, 岩波文庫, 1957, 119頁。
- (51) 『島崎藤村論』「新生について」, 亀井勝一郎著, 新潮社, 1953, 212頁。
- (52) 同, 213頁。
- (53) 同, 216頁。
- (54) 『島崎藤村』「新生」, 平野謙著, 岩波書店, 2001, 148頁。
- (55) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」「藤村文學入門」, 亀井勝一郎著, 河出書房, 1954, 10頁。

島崎藤村のパリ逃避行と『新生』をめぐる

- (56) 『島崎藤村論』「青春の回想と海」, 亀井勝一郎著, 新潮社, 1953, 176頁。
- (57) 『島崎藤村論』「新生について」, 亀井勝一郎著, 新潮社, 1953, 198頁。
- (58) 同, 199頁。
- (59) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」 「島崎藤村論」, 正宗白鳥著, 河出書房, 1954, 22頁。
- (60) 「臨時増刊 文藝 島崎藤村讀本」 「藤村文學入門」, 亀井勝一郎著, 河出書房, 1954, 9頁。

